

Fig. 3. A, schematic representation of a simple dendrite. B, relationship between membrane voltage vs. distance from soma for three cases of $GR=0.5$, 1.0 , and 2.0 . C, a similar plot shown in B. Parameters of dendrites in Case 1 and 2 were taken from experimental data.

膜電位変化の傾きが変化し、曲線の一次導関数は不連続であることが判る。さらに、 $GR=2.0$ の条件では、電位曲線は $GR=1.0$ の下側にあり、 $GR=0.5$ では殆どが $GR=1.0$ の曲線の上側に電位がある。このことから、 GR がより大きくなると、電位が伝播する際に、その減少率が大きくなることが判る。既に述べたように、Rallはこの状況を伝播効率が悪い場合とよんだ。

次に、2つのDA細胞の樹状突起から得た実際の計測データ例 (Case 1 and Case 2) を基に GR 、および、半径を決定し、Fig. 3Bと同様な枝の長さやパラメータ等の条件で膜電位の空間的变化を表した図を Fig. 3C に示す。また、同時に、Fig. 3Bの $GR=1$ の場合を重ね書きした。計測値では、同じ樹状突起の枝であっても、 GR が1の前後の値を不規則に取る為に、 $GR=1$ の曲線を上から下に、あるいは、その逆方法に横切る。しかし、樹状突起全体の電位変化としては、 $GR=1$ の曲線を覆うようになり、極端に電位減少が見られることはない。さらに、同一の樹状突起の枝に関して、分岐点が全て $GR>1$ 、もしくは、 $GR<1$ を満たす場合がみられなかったことから、受動的膜特性として、ある特定の樹状突起の枝が特異的に効率の良い (あるいは、悪い) ものに特化しているのではないことが推測される。また、上記は細胞間にも同様のことが言える。

4. 議論

(4・1) スライスの作成と細胞膜電位記録 本研究で

は、ラット黒質緻密部のDA細胞の形態を詳細に計測した。その結果、細胞体から樹状突起の先端部までの距離は、 $500-900\mu m$ に及び、DA細胞は、広範囲に渡ってシナプス入力を時空間的に統合できる可能性を示唆している。生後15日目のDA細胞では、平均して、細胞体から5-6本の樹状突起が伸び、2-3回程度の枝分かれが生じていることが判った。一方、生後3日目のDA細胞では、樹状突起の枝分かれの数は5-6回程度であり、生後15日までにそれらの枝が半分程度に刈り込まれることを示している。

一般に、神経細胞では、シナプス入力に細胞膜の電位を上昇させ、樹状突起から細胞体、軸索にその電位が伝達され、活動電位が軸索基部で発生する。この現象は、forward propagation とよばれる。一方、軸索の一部領域にある活動電位発生部位から、活動電位が樹状突起先端部に伝播する現象は、back propagation とよばれる。現在、活動電位は、神経情報の担い手であると考えられていることから、この符号化過程を理解することは神経科学の中心的な課題である。特に、単一細胞での活動電位の発生の時空間的シナプス統合過程に関しては、多くの先行研究がある⁽¹⁶⁾。

Rall は、その先駆的な研究によって、神経細胞の膜電位が時間発展する規則をケーブル方程式などの単純な偏微分方程式に置き換え、3次元形態をもつ神経細胞を簡略化する方法を提案した。特に、細胞形態をシリンダ状の形状に分割し、その集合体として扱うことによって、膜電位の伝播効率をシリンダの半径の関数と結びつけた。本研究では、この枠組みに従い、実測データに基づき、DA細胞形態を受動的膜と仮定した場合の伝達効率を理解しようと試みた。その結果、DA細胞の多くの分岐点では、Rallの $3/2$ 乗則は厳密には満たされておらず、Rallの言う意味での膜電位伝播は、細胞間、および、細胞内でも多様であることが窺える。この事実は、脊髄の運動ニューロンがRallの $3/2$ 乗則をほぼ満たしているのとは対照的である。しかし、今回の計測では、Rallの定義した GR 値は、多くの分岐点で $0.8-1.4$ の範囲に含まれており、極端に大きく1から外れていなかった。また、発達時期に従って、 GR のヒストグラムが $GR=1$ を中心とした左右対称な分布に変化することから、ドーパミン細胞集合全体では、Rallの $3/2$ 乗則に従う方向に変化すると考えられる。さらに、今回の実験データは $300\mu m$ 厚の脳スライスという限られた組織空間のサンプル値であり、実験の制約条件を差し引いて評価する必要もある。

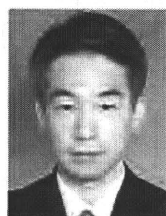
同じ樹状突起内の枝にRallの意味での伝播効率が良い分岐点と悪い分岐点が混在していることの機能的な意味は不明である。推測としては、一つの樹状突起の枝の入力信号を特異的に強調するのではなく、全体の入力をバランスさせ、平均化する機能をもつのかも知れない。そして、極端にRallの $3/2$ 乗則から外れる枝は、発達の段階が進むに従って、刈り込まれる可能性もある。

本研究では、イオンチャネル電流を含む能動的膜について考慮しなかった。しかし、近年の研究に拠ると、海馬や小脳の神経細胞と異なり、DA細胞は活動電位波形を維持し

文 献

- (1) M. B. Carpenter : "Core Text of Neuroanatomy", 4th Ed., Williams & Wilkins, Baltimore, Chap.11 (1991)
- (2) B. Liss and J. Roeper : "Individual dopamine midbrain neurons: Functional diversity and flexibility in health and disease", *Brain Res. Rev.*, Vol.58, No.2, pp.314-321 (2007)
- (3) W. Schultz : "Predictive reward signal of dopamine neurons", *J. Neurophysiol.*, Vol.80, No.1, pp.1-27 (1998)
- (4) M. F. Beal : "Excitotoxicity and nitric oxide in Parkinson's disease pathogenesis", *Ann. Neurol.*, Vol.44, No.3, pp.S110-114 (1998)
- (5) C. S. Chan, J. N. Guzman, E. Ilijic, J. N. Mercer, C. Rick, T. Tkatch, G. E. Meredith, and D. J. Surmeier : "'Rejuvenation' protects neurons in mouse models of Parkinson's disease", *Nature*, Vol.447, No.7148, pp.1081-1086 (2007)
- (6) A. Cheramy, V. Leviel, and J. Glowinski : "Dendritic release of dopamine in the substantia nigra", *Nature*, Vol.289, No.5798, pp.537-543 (1981)
- (7) C. J. Wilson and J. C. Callaway : "Coupled oscillator model of the dopaminergic neuron of the substantia nigra", *J. Neurophysiol.*, Vol.83, No.5, pp.3084-3100 (2000)
- (8) S. Kuznetsov, N. J. Kopell, and C. J. Wilson : "Transient high-frequency firing in a coupled-oscillator model of the mesencephalic dopaminergic neuron", *J. Neurophysiol.*, Vol.95, No.2, pp.932-947 (2006)
- (9) W. Rall : "Branching dendritic trees and motoneuron membrane resistivity", *Exptl. Neurol.*, Vol.1, No.1, pp.491-527 (1959)
- (10) W. Rall : "Theoretical significance of dendritic trees for neuronal input-output relations", in *Neural Theory and Modeling*, ed. R. F. Reiss, pp.73-97, Stanford University Press, Palo Alto, CA (1964)
- (11) W. Rall : "Membrane potential transients and membrane time constant of motoneurons", *Exptl. Neurol.*, Vol.2, No.5, pp.503-532 (1960)
- (12) R. Altenberger, K. A. Lindsay, J. M. Ogden, and J. R. Rosenberg : "The interaction between membrane kinetics and membrane geometry in the transmission of action potentials in non-uniform excitable fibres: a finite element approach", *J. Neurosci. Methods*, Vol.112, No.2, pp.101-117 (2001)
- (13) W. Rall : "Core conductor theory and cable properties of neurons", in *The Nervous System*, Vol.1 : Cellular Biology of Neurons, Part 1, ed. E. R. Kandel, Bethesda, American Physiological Society, pp.175-187 (1977)
- (14) J. W. Fleshman, I. Segev, and R. E. Burke : "Electrotonic architecture of type-identified alpha-motoneurons in the cat spinal cord", *J. Neurophysiol.*, Vol.60, No.1, pp.60-85 (1988)
- (15) W. Rall : "Change of action potential shape and velocity for changing core conductor geometry", *Biophys. J.*, Vol.14, No.10, pp.731-757 (1974)
- (16) N. Spruston, G. Stuart, and M. Hausser : "Dendritic integration, in Dendrites", Eds. Stuart G. Spruston N. Hausser M. Oxford University Press, Oxford, Chap.14 (2008)
- (17) P. Vitter, A. Roth, and M. Hausser : "Propagation of action potentials in dendrites depends on dendritic morphology", *J. Neurophysiol.*, Vol.85, No.2, pp.926-937 (2001)
- (18) A. E. Lindsay, K. A. Lindsay, and J. R. Rosenberg : "New concepts in compartment modeling", *Comput. Visual. Sci.*, Vol.10, pp.79-98 (2007)
- (19) K. A. Lindsay, J. R. Rosenberg, and G. Tucker : "From Maxwell's equations to the cable equation and beyond", *Prog. Biophys. Mol. Biol.*, Vol.85, No.1, pp.71-116 (2004)

館 野 高



(正員) 1968年8月7日生。1992年3月大阪大学基礎工学部生物工学科卒業。1994年3月同大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了(生物工学)。1994年4月NTT基礎研究所勤務。1999年4月大阪大学大学院基礎工学研究科助手。2002年から2004年Cambridge大学客員研究員、並びに、日本学術振興会海外特別研究員兼務。2007年4月大阪大学大学院基礎工学研究科准教授。2007年10月から科学技術振興機構さきがけ研究員兼務。現在、神経細胞の電気生理学に関する研究、および、微細加工技術を応用した人工感覚器開発に従事。

たまま樹状突起の先端部付近まで、back propagationを伝播させることができることが明らかになっており⁽¹⁷⁾、能動性の考慮は次の重要課題である。また、DA細胞では、軸索以外にも樹状突起で活動電位を発生させることが知られている。したがって、複数の活動電位発生部位から発生した電位が様々な方向に伝播し、神経伝達物質ドーパミンを放出しながら自己抑制することになり、そこではさらに複雑な情報処理を行っている可能性がある。

本研究では、Altenberger ら⁽¹²⁾の方法に従って、従来のコンパートメントモデルとは異なる有限要素法を用いた神経細胞形態の計算機上への実装方法を述べた。本研究では、特に、Altenberger らの方法を拡張して、Y 字形の分岐点を有する樹状突起形状に対し新たに適用する方法を簡単に述べた。1次元のコンパートメントモデルは、計算神経科学の分野で汎用的に利用されているが、空間的に分布する膜電位の変動を見る際に、連続体モデルとの乖離が生じることが指摘されている⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾。特に、Y字型コンパートメント自体を一つの「パーツ」として考慮することができない為に、どの様に小さくコンパートメントを分割しても、分岐点で位置に関するいくつかの変数の一次導関数の連続性が失われる (Fig. 3 参照)。この点は、1次元のコンパートメントの「モデル固有」の問題点であり、3次元連続体モデルでは、変数の高次導関数も滑らかに変化する点は注意を要する。したがって、近年多く用いられている汎用神経シミュレータの結果が実際の細胞でも妥当であるとは必ずしも言えない。今回用いた方法は3次元に容易に拡張が可能であるが、基本的には、1次元のコンパートメントモデルと類似の方法であり、同様の誤った解釈をしている可能性は否定できない。これらを検証するためには、樹状突起の立体形状を詳細に考慮し、2次元、および、3次元モデルへの拡張によって、本研究の問題点を再検討する必要がある、今後の課題としたい

5. 結 論

本研究では、中脳黒質のDA細胞の発達に伴う変化を、その特徴と機能の両面から理解することを目指した。本稿では、特に、中脳黒質DA細胞の生後発達の初期ステージにおける形態的特徴を対象とした。実測データに基づき、DA細胞形態を受動的膜と仮定した下で、伝達効率の観点から形態変化の特徴を理解しようと試みた。その結果、DA細胞の多くの分岐点では、Rallの3/2乗則は厳密には満たされておらず、Rallの言う意味での膜電位伝播は、細胞間、および、細胞内でも多様であることが明らかになった。

謝 辞

本研究の一部は、科学技術振興機構さきがけ研究「生命現象の革新モデルと展開」、および、科研費基盤研究(B)、新学術領域「伝達創成機構」および、萌芽研究の助成によって行われた。

(平成22年4月12日受付、平成22年6月21日再受付)

Synchronization of Firing in Cortical Fast-Spiking Interneurons at Gamma Frequencies: A Phase-Resetting Analysis

Nathan W. Gouwens^{1,2,3}, Hugo Zeberg^{1,3,3}, Kunichika Tsumoto^{4,5}, Takashi Tateno^{6,7}, Kazuyuki Aihara^{4,5}, Hugh P. C. Robinson^{1*}

1 Department of Physiology, Development and Neuroscience, University of Cambridge, Cambridge, United Kingdom, **2** Department of Neurobiology, Harvard Medical School, Boston, Massachusetts, United States of America, **3** Nobel Institute for Neurophysiology, Department of Neuroscience, Karolinska Institutet, Stockholm, Sweden, **4** Aihara Complexity Modelling Project, ERATO, Japan Science and Technology Agency, Tokyo, Japan, **5** Institute of Industrial Science, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, **6** Graduate School of Engineering Science, Osaka University, Osaka, Japan, **7** PRESTO, Japan Science and Technology Agency, Saitama, Japan

Abstract

Fast-spiking (FS) cells in the neocortex are interconnected both by inhibitory chemical synapses and by electrical synapses, or gap-junctions. Synchronized firing of FS neurons is important in the generation of gamma oscillations, at frequencies between 30 and 80 Hz. To understand how these synaptic interactions control synchronization, artificial synaptic conductances were injected in FS cells, and the synaptic phase-resetting function (SPRF), describing how the compound synaptic input perturbs the phase of gamma-frequency spiking as a function of the phase at which it is applied, was measured. GABAergic and gap junctional conductances made distinct contributions to the SPRF, which had a surprisingly simple piecewise linear form, with a sharp midcycle break between phase delay and advance. Analysis of the SPRF showed how the intrinsic biophysical properties of FS neurons and their interconnections allow entrainment of firing over a wide gamma frequency band, whose upper and lower frequency limits are controlled by electrical synapses and GABAergic inhibition respectively.

Citation: Gouwens NW, Zeberg H, Tsumoto K, Tateno T, Aihara K, et al. (2010) Synchronization of Firing in Cortical Fast-Spiking Interneurons at Gamma Frequencies: A Phase-Resetting Analysis. *PLoS Comput Biol* 6(9): e1000951. doi:10.1371/journal.pcbi.1000951

Editor: Lyle J. Graham, Université Paris Descartes, Centre National de la Recherche Scientifique, France

Received: March 21, 2010; **Accepted:** September 3, 2010; **Published:** September 30, 2010

Copyright: © 2010 Gouwens et al. This is an open-access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution License, which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided the original author and source are credited.

Funding: Supported by grants from the BBSRC and EC (HPCR), Daiwa Foundation (HPCR and KA), MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Areas No. 17022012 and FIRST, Aihara Innovative Mathematical Modelling Project, the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS)(KA), and a Churchill Foundation Scholarship (NWG). The funders had no role in study design, data collection and analysis, decision to publish, or preparation of the manuscript.

Competing Interests: The authors have declared that no competing interests exist.

* E-mail: hpcr@cam.ac.uk

These authors contributed equally to this work.

Introduction

Rhythmic oscillations of concerted electrical activity can occur in the neocortex and hippocampus at gamma frequencies (30–80 Hz), and are thought to be associated with a variety of cognitive tasks including sensory processing, motor control, and feature binding [1,2]. A striking feature of gamma oscillations is their ability to be generated locally in the neocortex. Local gamma oscillations can be produced by pharmacological [3,4], electrical [5] or optogenetic [6] stimulation. *In vivo*, synchronous gamma oscillations may be highly localized or widely distributed, even between hemispheres, with or without phase lags between different areas and layers [1]. It appears, therefore, that local neocortical circuits have an intrinsic capability for generating gamma oscillations, while sensory inputs and connections from other brain regions may shape the complex spatial patterns of oscillatory interaction.

Synchronized firing of cortical inhibitory interneurons has been implicated in the production of these rhythms in many experimental and modeling studies. During spontaneous network activity of the neocortex *in vivo*, the power of intracellular voltage fluctuations at frequencies higher than 10 Hz is dominated by

inhibitory postsynaptic potentials, which are correlated with the extracellular gamma rhythm, and which synchronously inhibit nearby pyramidal cells [7]. A recent study using conductance injection in neocortical pyramidal cells indicated that gamma-frequency-modulation of firing is almost completely determined by their inhibitory input [8]. In the hippocampus and cortex, models of interneuron activity suggest that network oscillations depend on mutually inhibitory synaptic conductances [9,10,11].

Fast-spiking (FS) inhibitory interneurons are coupled by electrical synapses in addition to mutual and autaptic inhibitory synapses [12,13,14,15]. Electrical synapses alone [12,13] or in combination with GABAergic synapses [14] can produce synchronous firing in pairs of these interneurons *in vitro*. In addition, the biophysical properties of FS neurons appear to be ideally suited to generating gamma rhythms: they have a hard (“type 2”) onset of regular firing at about 30 Hz [16], which means that they can be easily entrained at this frequency. They also show a strong intrinsic drive for spike generation at gamma frequencies when stimulated with broadband conductance noise [17]. Recently, selective optical stimulation of FS interneurons, but not of pyramidal neurons, was shown to cause gamma oscillations [6]. Electrical synapses amongst mutually inhibitory interneurons have

Author Summary

Oscillations of the electrical field in the brain at 30–80 Hz (gamma oscillations) reflect coordinated firing of neurons during cognitive, sensory, and motor activity, and are thought to be a key phenomenon in the organization of neural processing in the cortex. Synchronous firing of a particular type of neuron, the inhibitory fast-spiking (FS) cell, imposes the gamma rhythm on other cells in the network. FS cells are highly interconnected by both gap junctions and chemical inhibition. In this study, we probed FS cells with a synthetic conductance stimulus which mimics the electrical effect of these complex connections in a controlled way, and directly measured how the timing of their firing should be affected by nearby FS neighbours. We were able to fit a mathematically simple but accurate model to these measurements, the “synaptic phase-resetting function”, which predicts how FS neurons synchronize at different frequencies, noise levels, and synaptic connection strengths. This model gives us deeper insight into how the FS cells synchronize so effectively at gamma oscillations, and will be a building-block in large-scale simulations of the FS cell network aimed at understanding the onset and stability of patterns of gamma oscillation in the cortex.

been found to increase the precision of synchrony in simulation studies [18,19,20]. However, the relative roles of chemical inhibition and gap-junctional coupling in shaping synchronous oscillations in the cortex are still unclear.

The theory of synchronization of coupled oscillators uses the concept of phase dynamics to evaluate the stability of the relative phase of coupled oscillators in time [21,22]. The key to this approach is to determine the effect of a very small perturbing input on the phase of oscillation (“phase resetting”), as a function of the point in the oscillation cycle at which it occurs. This is most often used, under the assumptions of weak coupling and linear summation of phase shifts, to account for how the relative phase of presynaptic and postsynaptic cells evolves from cycle to cycle.

However, as described above, FS cells in the cortex are actually coupled quite strongly to other FS neighbours, with large postsynaptic conductance changes caused by each presynaptic action potential. Here, we have used synthetic conductance injection, or dynamic clamp, to directly measure the phase-resetting response to conductance inputs mimicking the effects of presynaptic action potentials, while systematically varying the relative strengths of electrical and GABAergic inhibitory conductances. The compound synaptic connections between FS neurons, together with the intrinsic spike-generating properties of FS neurons, give rise to a distinctively-shaped phase-resetting relationship, or “synaptic phase-resetting function”, which ensures rapid and precise synchronization over a large gamma-frequency range.

Results

Conductance injection reproducing synaptic input

FS cells in rat somatosensory cortical slices were identified by their morphology, action potential shape and characteristic firing pattern in response to depolarizing current injection [12,13,23,24]. FS cells fired high frequency, nonadapting trains of action potentials during depolarizing current steps, occasionally interrupted by pauses with subthreshold oscillations, particularly around threshold [16] (see Methods). We used conductance injection/dynamic clamp [25,26] to reproduce the effects of

electrical and chemical synapses (Fig. 1, see Methods). In FS cells, both gap junctions and GABAergic synapses from neighboring cells are located perisomatically [14], so that point conductance injection at the soma should reasonably reproduce the electrical effects of synaptic inputs. Gap junctions were implemented as a static conductance between the recorded cell and a “voltage-clamped” trajectory of “presynaptic” membrane potential. This “voltage-source” approximation, importantly, allowed us to characterize a functional mapping between the presynaptic spike time and the influence on postsynaptic membrane potential, without considering any reverse effect of gap-junctional current on the presynaptic cell. This is valid as long as the presynaptic cell is considered to be much more strongly controlled by its other inputs, as when it is already part of a synchronous assembly (see Discussion). It is estimated that each FS cell is gap-junction coupled, directly or indirectly, with a measurable coupling, to between 20 and 50 other FS neurons [27], so that if the presynaptic cell is quite strongly-driven by a major proportion of these inputs, then the effect of any one can be neglected. At rest, this gap-junctional input produced a small postsynaptic spikelet (Fig. 1a, left), very similar in size and shape to those observed with natural electrotonic coupling [12,13]. We also measured coupling coefficients (the ratio of postsynaptic to presynaptic potential change) for gap-junctional type conductance. These were similar to physiological values, and larger for step inputs (0.05–0.22) than for spike inputs (0.01–0.05), owing to low-pass filtering by the combined effects of gap junctional conductance and membrane resistance and capacitance [28].

Many pairs of FS cells are connected by both GABAergic (GABA_A, chloride conductance) and electrical synapses [12,13,14]. We simulated GABAergic synaptic input using conductance injection (Fig. 1a, middle). The GABA reversal potential (E_{GABA}) was set to -55 mV, based on gramicidin-perforated patch measurements in this cell type [10,29], considerably more depolarized than in pyramidal neurons [30]. Thus, inhibition is shunting in the range of membrane potentials between spikes during repetitive firing (Fig. 1b). Starting from the resting potential, the “IPSP” is a small depolarisation lasting about 40 ms, again very similar to natural IPSPs in these cells. At the resting potential, a stimulus with both electrical and GABAergic components produces a biphasic depolarizing response (Fig. 1a, right) with the gap-junctional potential visible just before the larger GABAergic potential. Unlike the gap-junctional spikelet, though, the amplitude of the GABAergic potential can change sign in the subthreshold, interspike range of membrane potentials, reversing around E_{GABA} [12].

Perturbing spike timing

To determine how this compound synaptic input shifts the timing of periodic firing in an FS cell, we applied conductance inputs during periodic firing elicited by a maintained excitatory stimulus, a step of excitatory conductance reversing at 0 mV. An example response to a compound “synaptic” perturbation is shown in Fig. 1b. In phase-resetting analysis of synchronization, the state of the neuron is characterized by a single quantity, the phase angle, $\phi(t)$, which – in the absence of any perturbations – increases linearly with time, and which is reset to zero whenever it reaches 2π , corresponding to the occurrence of a spike [21]. The variability of interspike intervals can be represented by adding additional noise, due to stochastic gating of ion channels and other intracellular sources of variability, to the rate of change of $\phi(t)$. To measure the phase *resetting*, or shift in the phase, produced by synaptic-like conductance inputs, we applied isolated single inputs during long trains of periodic firing. Fig. 1c shows the relationship between the time t_p at which an input (in this case a compound

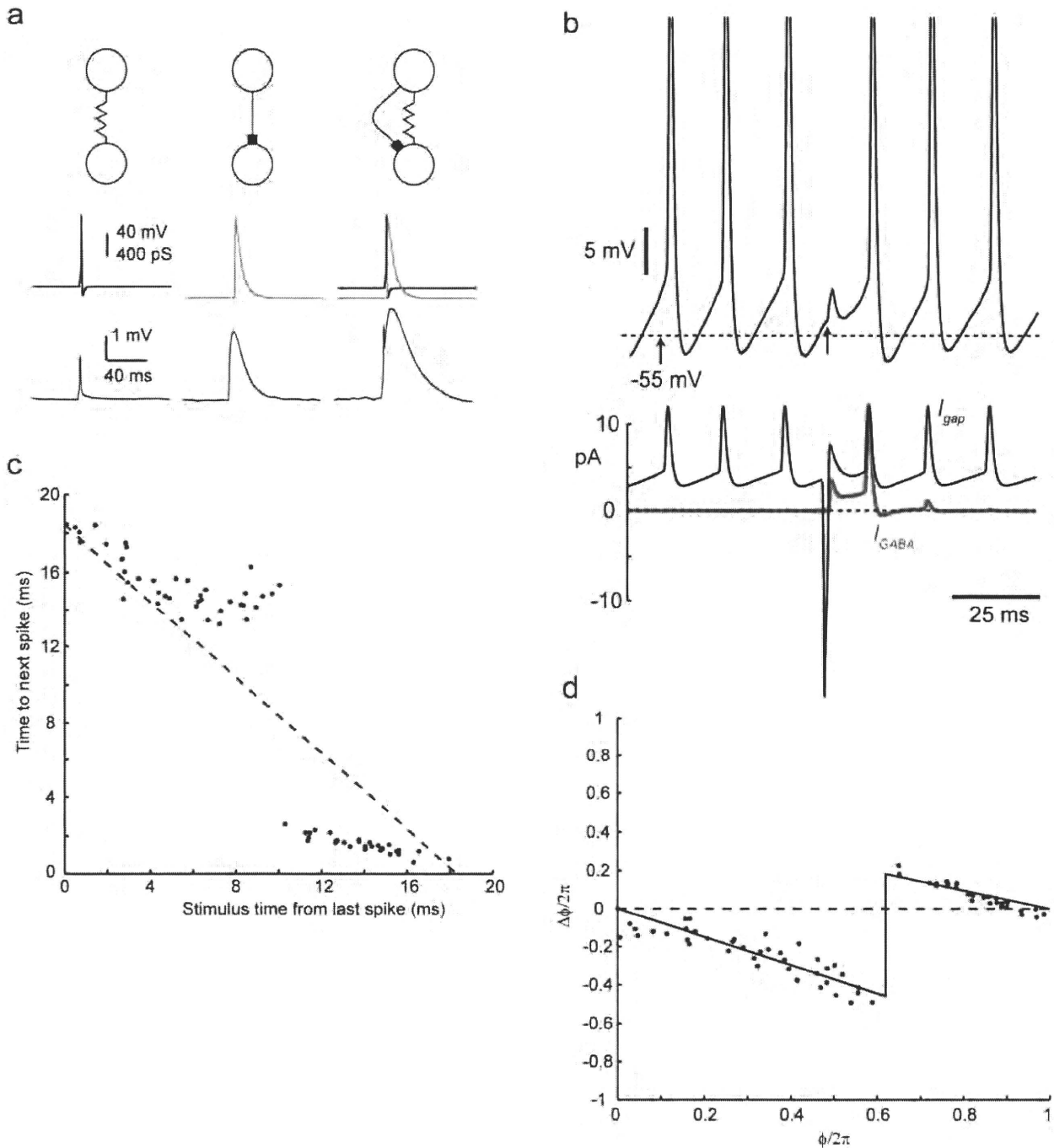


Figure 1. Synaptic connections between FS cells simulated by conductance injection. a) *Left*, an electrical synapse (top), simulated by a time-varying E_{rev} signal (middle), and a constant conductance of 750 pS, produces a spikelet in the recorded neuron (bottom). *Center*, a GABAergic synapse (top). A transient of conductance reversing at -55 mV mimics a GABA_A synaptic input (middle), producing a small depolarization from rest (bottom). *Right*, a compound electrical/GABAergic connection (top). Combined input from both types of conductances (middle) produced a response with a sharp, electrical synaptic component followed by a longer-lasting IPSP (bottom). Each panel is recorded from a different cell. b) expanded view of the membrane potential trajectory (top, spike peaks truncated) and injected currents (bottom, gap-junctional current in black, current through GABAergic conductance in gray, outward current is represented upwards) during application of a single compound conductance perturbation ($g_e = 0.2$ nS, $g_i = 1.4$ nS) starting at the time indicated by an arrow, in this case inducing a delay in the subsequent spike time. c) Relationship between time at which input is applied and the time to next spike and d) corresponding phase-resetting relationship, or synaptic phase-resetting function. doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g001

gap/GABA input) is applied, relative to the time of the preceding spike, and the time until the next spike occurs (t_n). This clearly deviates from the line of slope -1 (dotted line) expected in the absence of any input, and has two approximately linear regions

separated by a sharp transition. Note the characteristic progressive decrease in the variability of this relationship, as t_p increases – this is because the earlier the input arrives, the more time is left for integrating the effects of noise before the next spike.

The synaptic phase-resetting function and the effect of varying electrical and inhibitory conductances

From this relationship, we can estimate the phase at the moment that each input is applied, and the amount of phase resetting $\Delta\phi$ produced by the input (see Methods), as shown in Fig. 1d, in which $\Delta\phi$ is plotted as a function of ϕ . This relationship - the total phase-resetting effect of a synaptic input as a function of the phase at which it arrives - we will refer to as a synaptic phase-resetting function (SPRF), to distinguish it from a classical phase response or phase-resetting curve, which normally describes responses to very small, brief inputs, whose effects can be considered to sum linearly. We examined how the parameters of the synaptic input determine the shape of the SPRF, by varying the magnitude of gap-junctional and GABAergic conductance, applied individually or together (Fig. 2a-f). These components vary physiologically, since FS cells' interconnections can be purely GABAergic (one-way or reciprocal), purely gap-junctional or both [12,13,14]. In addition, there is a wide range of electrical synaptic strengths [28].

Purely GABA input produced a phase delay early in the cycle, which increased during the cycle until an abrupt critical point, beyond which it had no effect (Fig. 2a). Introducing a small (250 pS) gap junction, caused a linear region of phase advance (Fig. 2b), as in Fig. 1d, which had an abrupt onset at a phase of about 1.2π . A sharp transition marks the boundary between this region and the first, phase delay part of the phase cycle. The slope of the phase advance region became more negative, and the boundary between the regions, designated the critical phase ϕ_c , shifted earlier in the cycle, as gap junctional conductance increased (Fig. 2c, d, e). With no GABAergic input, a phase advance region produced by gap junctional input is seen in isolation (Fig. 2f).

Thus, GABAergic input retards, and gap-junctional input advances the phase of firing. For the compound gap/GABA input, the early region of phase delay has a slope determined by the amplitude of inhibition, g_i (see Methods), and switches abruptly, midcycle, to a region of decreasing phase advance, whose slope is determined by g_e , with no detectable sign of cancellation of the two regions in midcycle. The only clear interaction between the electrical and GABAergic components was that a larger gap junctional conductance shifted ϕ_c to earlier in the cycle.

To quantify the goodness of fit of the piecewise linear SPRF, we performed a chi-square test of 130 phase response curves (in total 6111 data points, 10 cells). For each SPRF, variance of phase was estimated from an unperturbed spike train within the same experiment (median $\sigma^2 = 0.021 \text{ (rad/2}\pi\text{)}^2$). 111 of 130 SPRFs contained no significant difference between the model fit and experimental result ($p < 0.05$). The average reduced chi-square value was 0.80, meaning that the overall fit of the model is extremely good, given the measured degree of variance in the phase. On the whole, the relatively simple piecewise linear model performs remarkably well.

The dependencies of the slopes and breakpoint on the strengths of g_i and g_e were also fitted by linear relationships (Figure 3). The negative slope of the region of phase delay was proportional to inhibition ($\alpha = ag_i$, Fig. 3b), the negative slope of the phase advance region was proportional to excitation ($\beta = bg_e$, Fig. 3a), while ϕ_c was weakly sensitive to g_e ($\phi_c = c - dg_e$, Fig. 3c). Average values of a and b of this piecewise linear model for the SPRF were $a = 0.16/\text{nS}$ ($n = 7$ cells, 3 cells providing insufficient data for analyzing this dependency), $b = 0.69/\text{nS}$ ($n = 10$ cells). c and d were more variable from cell to cell, and the pooled data in fact showed

little overall dependence on g_e (not shown). Nevertheless (e.g. Fig. 3c), the weak relationship is clear within individual cells.

Entrainment by synaptic input

Having established that conductances resembling the synaptic input of neighboring FS cells can consistently modify spike timing, we next tested the ability of FS cells to synchronize to, or to be entrained by this input. To visualize the time course of entrainment, we examined responses stroboscopically [22], sampling the phase of the FS cell at the times of periodic stimuli. Figure 4 shows such an experiment. Before the conductance pulses are switched on (*open circles*), the phase changes in a "sawtooth" pattern, reflecting detuning - the continuously growing phase difference between two oscillators of different frequencies. After the conductance transients begin (Fig. 4, *filled circles*), the phase quickly converges on a fixed value relative to the stimulus, at about 0.6π (dashed line), which matched the expected equilibrium phase difference from solving Equation 2 with parameters for this cell. Thus the FS cell becomes phase-locked and frequency-locked to the stimulus train, with spikes occurring around 0.6π before, or equivalently 1.4π after each stimulus. After the end of the stimulation train, the phase reverts to the drifting detuned state.

The piecewise linear SPRF could also account for the frequency band over which synchronization was possible. Fig. 5 shows an experiment in which an FS neuron firing at a steady frequency F was stimulated repeatedly with a periodic synaptic conductance input at frequency f , and an index of the synchrony of the cell with the input (S , varying between 0 and 1, see Methods) was measured over a range of frequencies. As seen in Fig. 5a, this changes from a low level when f is very different from F , to a high value approaching 1, when $f \approx F$. Because of the effects of noise in the neuron, there is no absolute phase locking ($S < 1$), and the change in synchrony with input frequency does not have abrupt boundaries, but falls away continuously as the difference between f and F grows. It is clear that the central region of high synchrony lies below the unperturbed or natural firing frequency F when only inhibition is applied (Fig. 5b), above F when only gap-junctional conductance is applied (Fig. 5c), or both above and below F when a compound input is applied (Fig. 5a). This observation was duplicated by the piecewise linear model of the SPRF, analysis of which (see Methods) predicted the 1:1 synchronized frequency bands shown in gray, for the deterministic (noise-free) case - in this neuron, these boundaries corresponds to a synchrony of about 0.7. The synchronized frequency band is much narrower for either gap-junctional stimulation alone (Fig. 5b) or GABAergic inhibition alone (Fig. 5b). Iterations of the noisy stroboscopic map derived from the fitted SPRF (Eq. 2) showed that it could also reproduce the distribution of S adequately (black curves in Fig. 5a-c). Thus the piecewise linear model of the SPRF appears to account very well, both for the frequency range and degree of synchronization in noise.

Frequency bands of deterministic and stochastic synchronization

We next used the SPRF to predict the frequency ranges of entrainment for different strengths of inhibition and electrical coupling (Fig. 6), by analyzing the bifurcations at the onset of synchrony in the stroboscopic map of the phase, i.e. the map of the phase of the postsynaptic cell at successive presynaptic spike times in a regular train (see Methods, equation 2). For the deterministic (zero noise) case, 1:1 entrainment corresponded to a stable fixed point of the map, labelled ϕ^* in the example shown in Fig. 6a. As the amount of detuning (difference between f and F) varies, the map shifts vertically, so that at certain stimulus frequencies, the fixed point

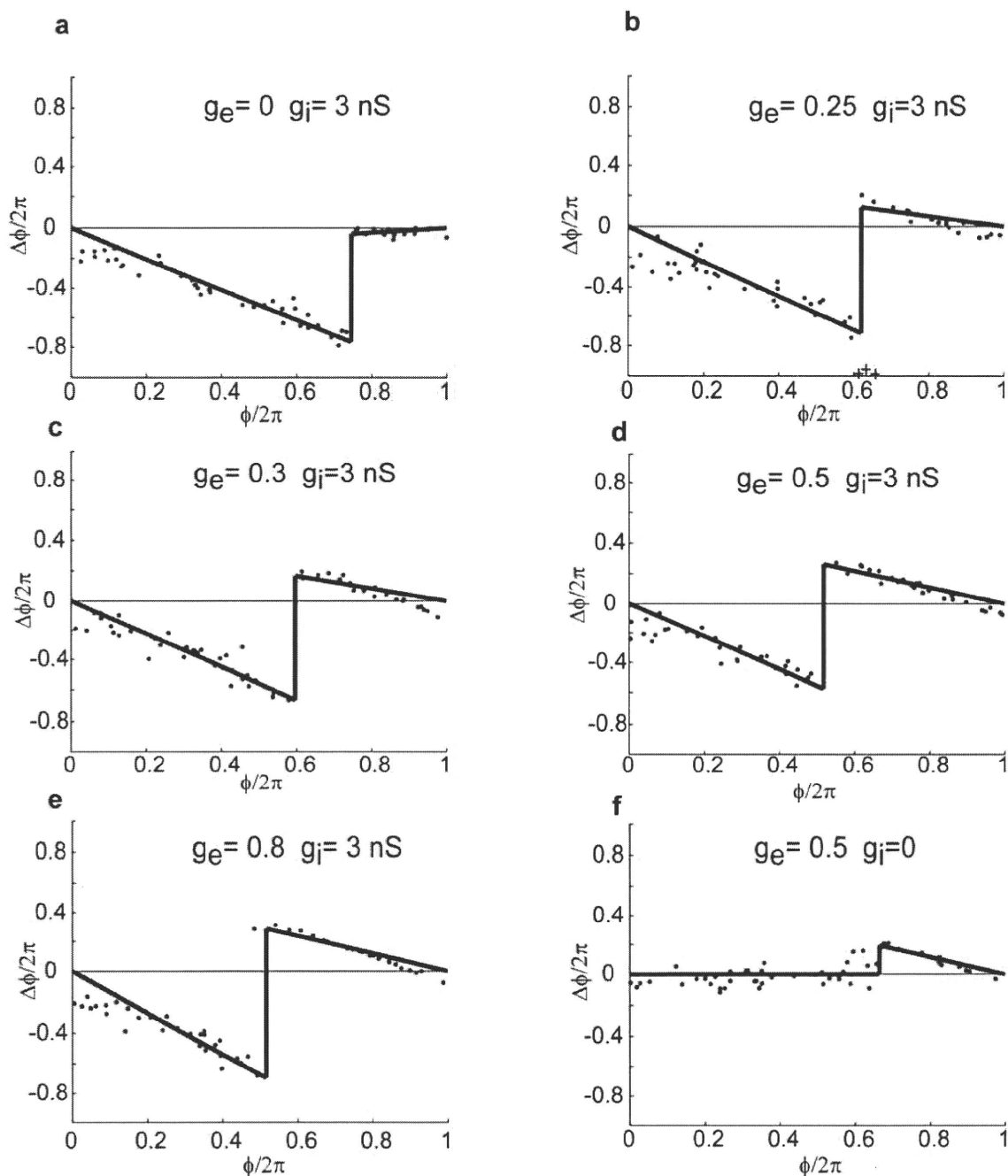


Figure 2. SPRFs in one cell for different strengths of gap-junctional and inhibitory conductance. a) inhibition only. Phase delay increases linearly as the phase of onset of the synaptic perturbation increases, before an abrupt loss of sensitivity late in the cycle. b) As gap-junctional conductance is introduced, phase delay switches to a region of linear phase advance late in the cycle “+” symbols indicate outliers excluded from the piecewise linear fit using Grubbs’ test, as described in the Methods. c), d), e). As gap-junctional conductance is increased, the slope of the phase advance region becomes larger, and the point of switching is shifted progressively earlier in the cycle. f. switching off inhibition completely leaves only the late phase advance (compare to d)). doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g002

disappears (at a “corner-collision” bifurcation [31]). Thus, it is possible to plot the regions in which there is synchronization in the $g_e f$ plane (Fig 6b) or the $g_i f$ plane (Fig. 6c,d). These form Arnold’s tongues [22] in which the frequency range of entrainment shrinks as the synaptic strength is reduced.

This analysis shows a number of effects which are relevant to the physiological function of FS neurons. Increasing g_e strongly

increased the upper frequency limit of entrainment and weakly increased the lower limit (Figs. 6b). When $g_i = 0$ it is impossible to entrain firing with $f < F$. Conversely, with $g_e = 0$, it is impossible to entrain for $f > F$, and increasing g_i strongly reduces the lower frequency limit of entrainment (Fig. 6c,d).

Since physiologically, entrainment must occur in the face of considerable noise, we also investigated the effect of adding noise

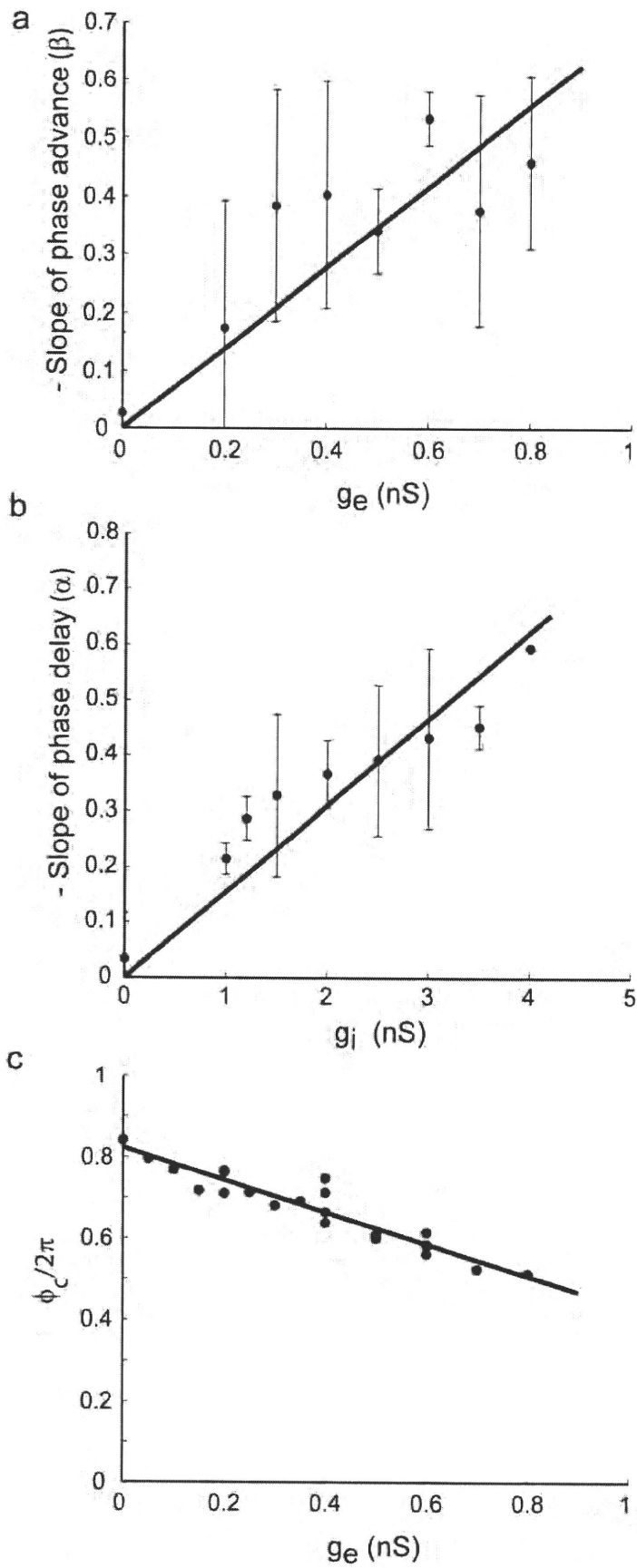


Figure 3. SPRF parameters depend on the strength of synaptic perturbation in a simple manner. a. Dependence of the phase advance slope ($-\beta$) on the gap-junctional conductance (for $g_i = 1.5$ nS). Data pooled from 120 measurements in 10 cells. b. Dependence of the phase delay slope ($-\alpha$) on g_i . Data from 43 measurements in 7 cells. c. Dependence of the critical phase at which delay switches to advance (ϕ_c) on the gap-junctional conductance g_e in one cell. doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g003

to the phase map. It is possible to define stochastic bifurcation points of the map F , at which there is a qualitative change in the nature of the stochastic dynamics. These points coincide with the deterministic bifurcation frequencies [32] for $\sigma = 0$ (see Methods for details). We examined the frequency extents of this kind of stochastic entrainment at different noise levels (Fig. 6b–d). In all cases, increasing the noise in the phase shrinks the region of entrainment. For $\sigma = 0.1$ rad/ 2π , which was a typical noise level in these cells *in vitro*, the area of stochastic entrainment shrank to a third or less of the noise-free case. This noise-induced distortion is not symmetrical in the frequency axis. For example, Fig. 6d shows that in the absence of electrical coupling, the lower frequency limit of entrainment was highly susceptible to noise while the upper limit was not. The greater the level of electrical coupling (g_e), the more the upper limit was reduced by noise.

The SPRF makes several predictions. First, FS cells receiving purely electrical synaptic input will synchronize effectively when driven at frequencies higher than F . Higher frequencies can be followed with stronger electrical input. Second, cells will synchronize to purely inhibitory input at frequencies lower than F , and stronger inhibition allows lower frequencies to be followed. Third, combined electrical and inhibitory input allows cells to synchronize to frequencies both above and below their unperturbed frequency. Although noise diminishes the frequency band of synchronization, sometimes asymmetrically, these conclusions remain valid in the presence of noise. For typical strengths of combined electrical-inhibitory synaptic connections, 20 Hz or

greater bandwidths of stochastic synchronization persist even in quite high levels of noise ($\sigma = 0.1$).

Discussion

Measuring the effect of synaptic conductance on phase of periodic firing

A number of previous theoretical and experimental studies have examined the phase-resetting properties of cortical neurons. Ermentrout and Kopell developed a theoretical approach to calculate what they termed the “synaptic interaction function” based on phase response curves and the assumption of weak coupling [33]. Reyes and Fetz (1993) stimulated synaptic inputs to regularly-firing pyramidal neurons to measure the phase resetting produced by EPSPs [34], while Stoop et al. (2000) used similar measurements to predict input frequency regions for entrainment and chaos [35]. Netoff et al. used dynamic-clamp to measure phase-resetting (or spike-time response curves) by artificial excitatory or inhibitory conductances in excitatory stellate cells of medial entorhinal cortex, and oriens-lacunosum-molecular interneurons in the CA1 region of hippocampus [36], and were able to demonstrate synchronization in pairs of neurons connected by artificial conductances mimicking synaptic connections, or between biological neurons and simulated neurons. In fast-spiking inhibitory cells, Mancilla et al. (2007) measured phase-resetting relationships for small current pulses (weak coupling) and showed that they could account quite well for synchronization of pairs of gap-junction coupled FS cells, both experimentally and in a biophysical model of FS neurons [37]. In this paper, we go further, by using conductance injection (dynamic clamp) to reproduce the combined effect of gap-junctional and strong synaptic connections, and using this to predict the resulting synchronized frequency bands, and their dependence on synaptic strength, including the effect of noise in the synaptic phase-resetting function on synchronization.

The conductance pulses which we have used are based on the physiological properties of the synaptic connections between FS neurons. In FS neurons of a basket morphology, APs initiate in the axon [38] arising usually from a proximal dendrite, [39] and receive many of their inhibitory connections and gap junctions from other fast-spiking interneurons perisomatically [14]. Thus, dynamic clamp recordings at the soma should provide a reasonably realistic simulation of the natural gap-junctional and fast inhibitory input.

In order to carry out this analysis, we have made the approximation that, between spikes, the presynaptic voltage of the gap-junctional input was held at a resting potential of -70 mV. In other words, we have focused on the effect of gap-junctional current flow associated with the discrete event of the presynaptic spike. This approach does not take account of the way in which presynaptic membrane potential would gradually depolarize between spikes, if firing periodically. We have also ignored the two-way nature of coupling between cell pairs. In other words we model entrainment of one cell by another, rather than synchronization of a symmetrical coupled pair. Although both electrical and inhibitory coupling can often be asymmetrical [13,40], they may also be quite symmetrical. However, the entrainment studied here models the situation where the presynaptic cell is already imperturbably-driven as part of a strong synchronously-firing assembly of FS neurons, so that the phase and

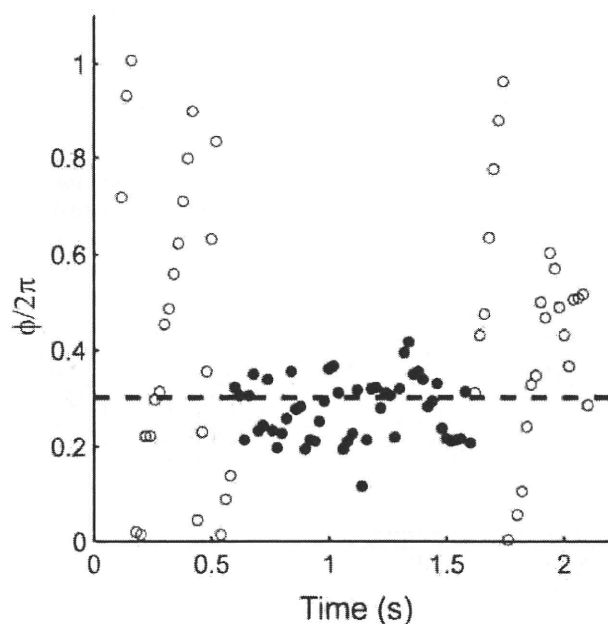


Figure 4. Entrainment of firing to a periodic conductance input. An example of a stroboscopic plot of the phase of a neuron, observed in phase with stimulation by a compound synaptic-like conductance of ($F = 56$ Hz, $f = 50$ Hz, $g_e = 750$ pS and $g_i = 3$ nS). The conductance pulses are applied during the period indicated by filled circles. Dashed line indicates the equilibrium solution of Eq. 2 for this cell. doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g004

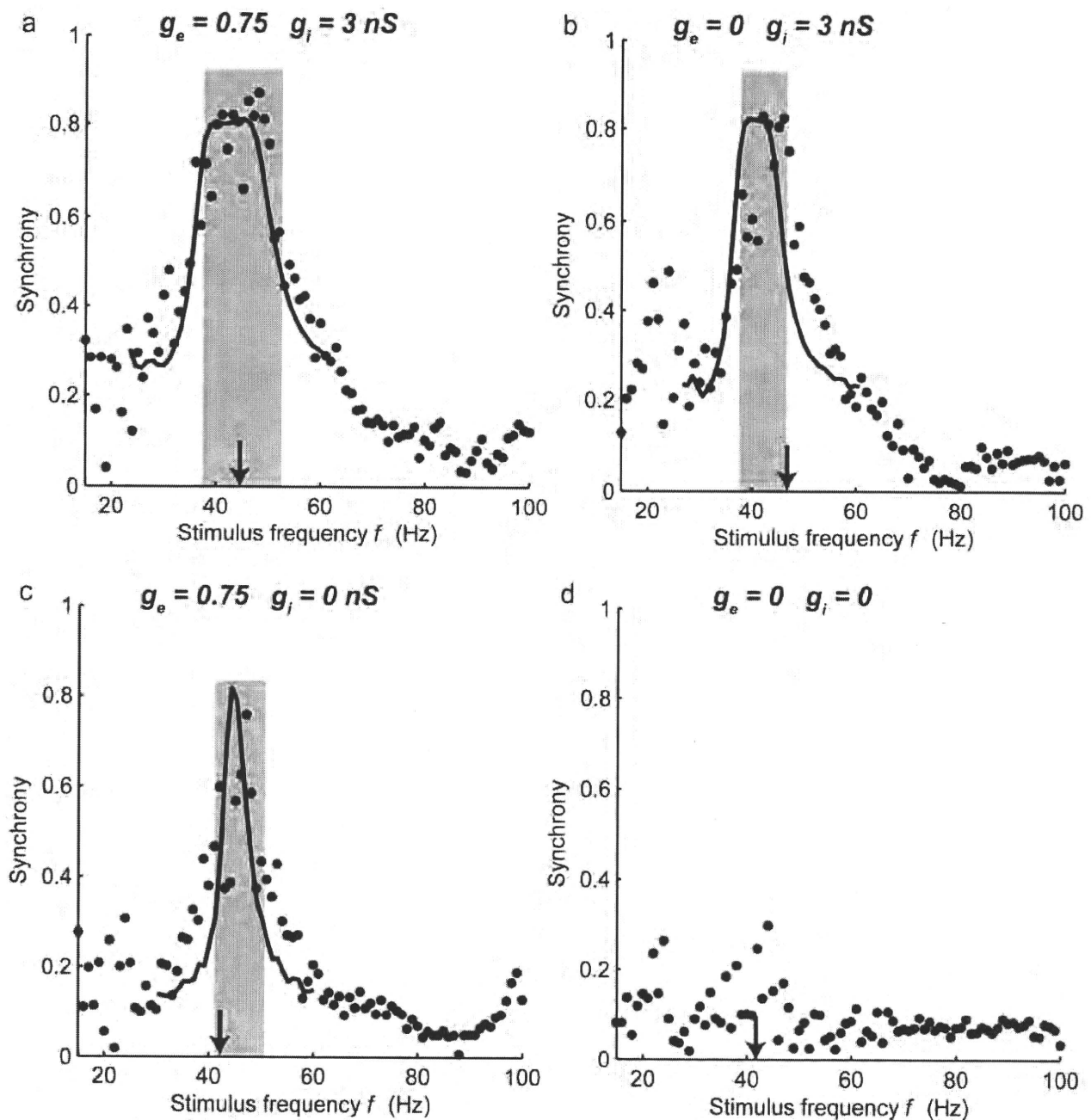


Figure 5. Frequency dependence of entrainment. The synchrony measure S (see Methods) is plotted as a function of the frequency of the entraining input. Conductance values as shown. a) compound gap-junctional/inhibitory input. b) pure inhibitory input. c) pure gap-junctional input. d) random level of synchrony in the absence of conductance input. Arrowheads indicate the natural firing frequency F in the absence of perturbations, and gray regions indicate the frequency bands of 1:1 synchronization predicted by the measured SPRF. Solid curves in (a)–(c) show the calculated steady-state synchrony of the fitted noisy SPRF model.
doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g005

frequency of its firing will be clamped to that of its predominant input. Thus, the SPRF that we measure should be an effective model for describing recruitment of new cells to such a synchronous assembly.

It is expected that the preferred firing frequency F of the postsynaptic cell may also affect the form of the SPRF, since the timing of intrinsic ion channel kinetics will shift relative to phase as the cycle length changes. In a few experiments where we were able to address this issue, we indeed found evidence of a change in the parameters of the SPRF model. *a*, the dependence of phase delay on g_e , increased quite strongly as firing frequency increased, and ϕ_c

shifted earlier in the cycle as firing frequency increased. The dependence of *b* and *d* on firing frequency was not marked. The relatively strong effect on *a* may partly reflect the long duration of the IPSP conductance relative to the period of the cycle.

The synaptic phase-resetting function

The synaptic phase-resetting function, or SPRF, for compound input was distinguished by the following features: an extremely abrupt midcycle switch from phase delay to phase advance, which shifted weakly towards the early part of the cycle as the strength of

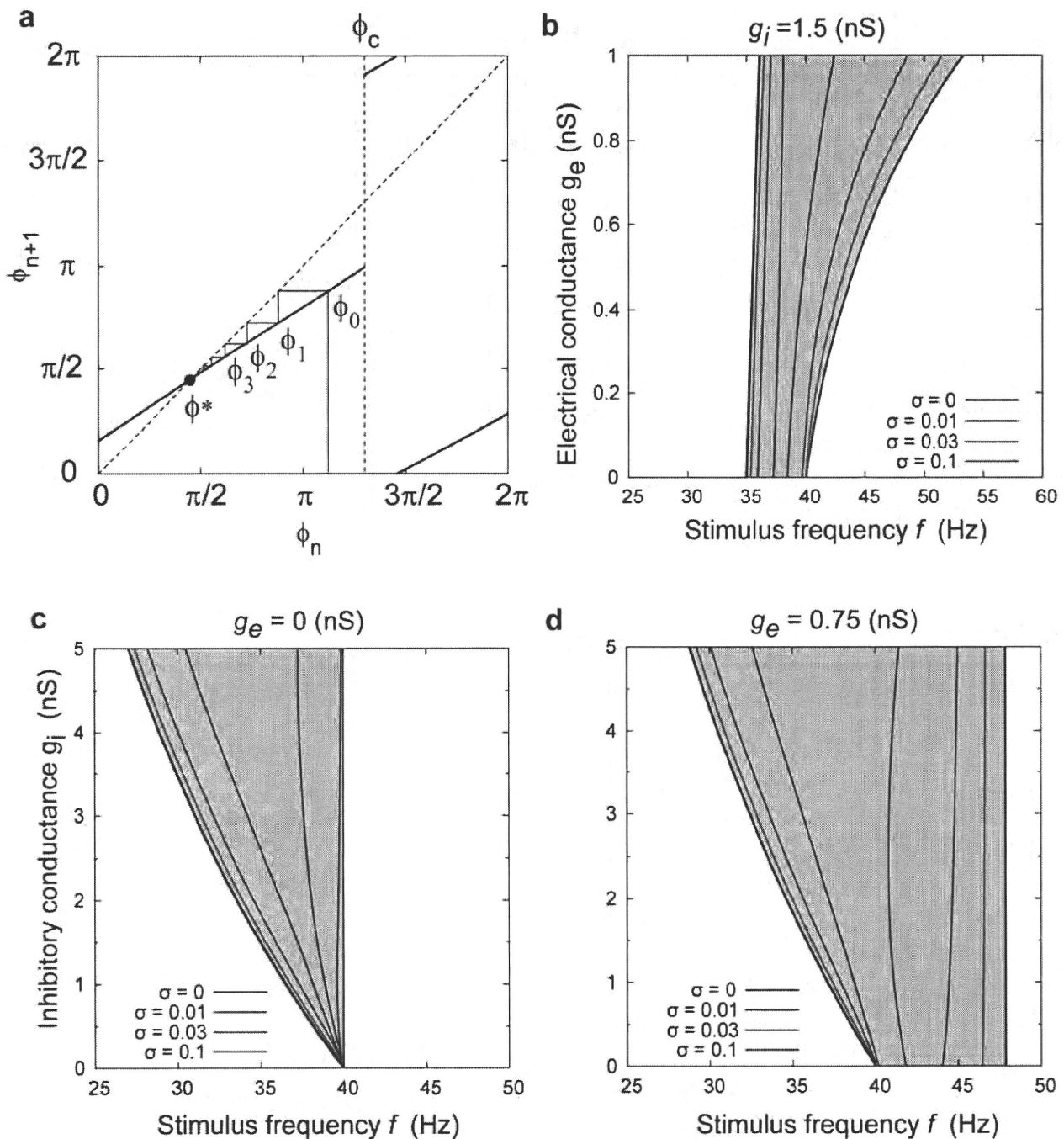


Figure 6. Bifurcation analysis of frequency bands of synchronization. a) piecewise linear map between phase at stimulus n and phase at stimulus $n+1$. The point ϕ^* on the diagonal is a stable fixed point of the map, as illustrated by the converging orbit ϕ_1, ϕ_2, \dots showing that 1:1 entrainment occurs at this stimulus frequency. b) bifurcation points of 1:1 entrainment in the g_e, f plane, $g_i = 1.5$ nS. 1:1 entrainment occurs in the gray regions. $\sigma = 0$, deterministic case. For $\sigma > 0$, stochastic bifurcation points with added Gaussian noise in the phase (see text). c) synchronization region in the g_e, f plane, with $g_e = 0$. d) as in (b), with $g_e = 0.75$ nS. Raising g_e strongly increases the upper frequency limit of entrainment, and weakly increases the lower limit. Noise shrinks the stochastic synchronization region. Parameters: $a = 0.12/\text{nS}$, $b = 0.625/\text{nS}$, $c = 0.8 \cdot 2\pi$ rad, $d = 0.2 \cdot 2\pi$ rad/nS. doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g006

electrical coupling was increased; amplification of the phase delay region by increasing inhibition; and amplification of the phase advance region by increasing gap-junctional coupling. We found that these qualitative features were also present in a biophysical model of firing in fast-spiking cells [41] (see Methods), incorporating voltage-gated sodium, Kv1.3 and Kv3.1/3.2 potassium channels, and stimulated with exactly the same inputs as used

experimentally (Fig. 7). In this fully-deterministic model, we also observed a very fine local structure of fluctuations around the main relationship, particularly in the phase delay. Despite these qualitative similarities between the model and experimental results, there were also major differences. In experiments, phase advance was produced exclusively by gap-junctional conductance and phase delay exclusively by inhibition, while in the model, gap-

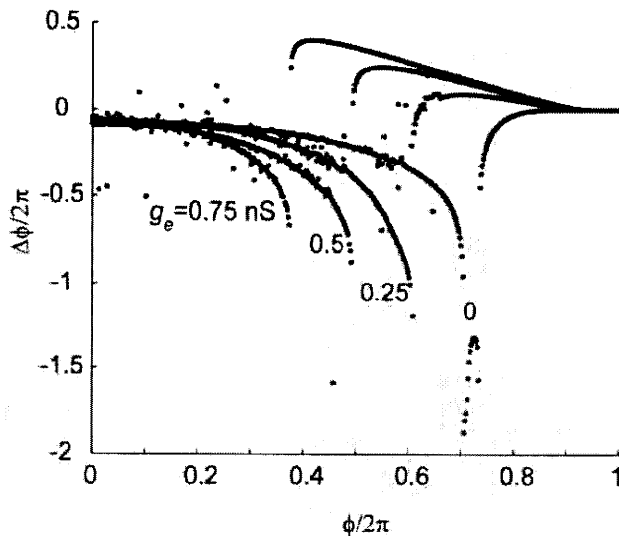


Figure 7. SPRF simulated for the Erisir et al., 1999, fully-deterministic biophysical model of an FS cell. $g_i = 1.5$ nS. 4 different values of g_g are used as indicated. $F = 40$ Hz. Phase shifts are evaluated in steps of $0.002/2\pi$ in the onset phase of the compound synaptic input. Extraneous points lying off the main curves, particular for phase delays, reflect a complex local fine structure of the phase shift, around the central relationship.
doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.g007

junctional input did affect phase delay strongly early in the cycle – this was never observed experimentally. This deficiency of the biophysical model suggests that additional conductances expressed in FS neurons somehow help to confer a complete immunity to gap-junctional stimulation in the early, phase-delay part of the cycle. We surmise that the voltage-gated potassium conductance in this part of the cycle may actually be much higher than in the model, and that this may allow phase delay and advance to be regulated completely independently. Also, because of their relative timing, the effect of inhibition will outlast that of the gap-junctional current transient – thus phase delays caused by inhibition starting early in the cycle may in fact be caused more by their persistence until later in the cycle. In addition, the model shows a pronounced curvature in the phase delay region of the SPRF which was not noticeable in any experimental recordings. This might reflect the presence of other voltage-dependent conductances in real FS cells which effectively linearize this part of the relationship.

The sharp discontinuity between phase delay and advance which emerges at high synaptic strengths is a result of the particular intrinsic biophysical properties and the nature of the synaptic perturbation. It appears to be related to the “class 2” nature of the FS neuron threshold [16], and may be sensitively determined by the potassium conductance densities and kinetics [42,43]. It was not observed for example in a class 1 excitable Morris-Lecar model. The discontinuity is a critical decision point, or threshold, in the progression of the membrane potential towards spike initiation, at which hyperpolarization and depolarization both exert their maximal influence. The effect of this shape of SPRF is to ensure very rapid synchronization of the cell. Maximal phase shift occurs in the middle of the cycle when the phase difference is high – the postsynaptic cell either advances or delays its phase to achieve nearly immediate in-phase firing when detuning between pre- and postsynaptic cell is small. This extremely sharp midcycle transition is not observed in conven-

tional phase-resetting relationships to weak brief inputs in these cells [37,44], and is a consequence of the integration of the strong compound input.

The piecewise nature of the SPRF, with the phase advance contributed exclusively by gap-junctional input, and the delay component contributed exclusively by chemical inhibition, mean that these two types of connection have complementary roles in synchronization: gap junctions are necessary to entrain the firing of the postsynaptic cell to a frequency higher than its preferred frequency, while inhibitory synapses are necessary to entrain firing to a frequency lower than the preferred frequency (as seen in Figures 5 and 6). This can be seen as follows. Let H be the phase difference between postsynaptic and presynaptic cells ($\phi_{post} - \phi_{pre}$). The change in H over one period of the input, i.e. from input i to input $i+1$, is: $H_{i+1} - H_i = 2\pi(F/f - 1) + \Delta\phi(H_i)$. Therefore, when entrainment is achieved, $H_{i+1} = H_i = H_\infty$, and so if $F > f$, then $\Delta\phi(H_\infty) > 0$, and if $F < f$, then $\Delta\phi(H_\infty) < 0$.

Using the SPRF to predict entrainment

Using the SPRF to model entrainment assumes that the effect of each stimulus in the train is the same as if it was applied in isolation. The success of the SPRF in predicting entrainment shown here demonstrates that it is at least a good approximation for this purpose, and that the arithmetic of adding effects of multiple sequential synaptic inputs behaves reasonably linearly. The SPRF assumes that the entire dynamical state of the neuron may be represented by just a single number at any time, the phase, which would imply that its dynamical state always lies on a limit cycle, along which it is kicked instantaneously forwards and backwards by the synaptic inputs. The complex dynamics of a real neuron containing a large number of different voltage-dependent conductances distributed in a complex morphology, and the strong and non-instantaneous nature of the perturbation mean that this is a considerable simplification of the reality. An indication of whether the phase approximation is reasonably valid, is to test whether there is any higher-order phase resetting, i.e. changes in the interspike interval *following* that during which the input is applied, or in subsequent intervals. When we analysed second order shifts, we found that they were sometimes detectable, but very small in relation to the first-order SPRF (See Figure S1), in line with the short memory of FS cells for input conductance fluctuations [17].

Physiological consequences of the synaptic phase-resetting function

FS cell firing is suspected to be directly and primarily responsible for producing gamma oscillations in the neocortex [6,7,8]. Different fine-scale subnetworks of mutually-exciting pyramidal cells in layers 2 or 3, which are driven by specific subsets of local layer 4 inputs, appear to interact with other such subnetworks via the inhibitory interneuron network [45]. Synchronization of FS cells, therefore, may be essential for linking responses of pyramidal cells very rapidly to specific features of the synaptic input, as hypothesized to occur in sensory “binding” [2]. We have shown that the effect of conductance inputs which realistically mimic single synaptic connections on the phase of FS firing is very powerful, and is capable of entraining the postsynaptic cell even against strong noise. The strikingly sharp discontinuity between phase delay and advance in the SPRF causes a very rapid jump to nearly in-phase firing.

The relative strengths of electrical and inhibitory components can vary greatly from connection to connection [12,13], and some pairs of FS cells connected by gap junctions can synchronize their firing, while others cannot [14]. The strengths of these

components will also vary dynamically. Electrical synapses can exhibit plasticity through G protein-coupled receptor activation, intracellular calcium and phosphorylation [46], and the GABAergic connections show strong short-term depression [12,13,14]. These effects presumably help to shape the spatiotemporal dynamics of synchronous firing. The model that we introduce here could easily accommodate independent plasticity rules for inhibition and gap junctions, by additional rules for modifying the slopes of the corresponding regions of the SPRF. In addition to such modulation, the GABA_A receptor is also the target of many important neuroactive drugs, such as benzodiazepines, barbiturates and ethanol. These will be expected to influence the shape of the SPRF, and the synchronization behavior of FS cells in the gamma frequency range. The SPRF, therefore, may be a useful tool for characterizing the action of such compounds on pathological network states treated by such drugs.

Firing is considerably more variable *in vivo* than *in vitro* [47], and it is important to consider the consequences of the SPRF in strong noise. The stochastic bifurcation analysis that we carried out (Fig. 6) delineated a well-defined boundary between entraining and non-entraining frequencies, based on a qualitative change in the nature of the motion of the phase [32] (see Methods). The stronger the noise, the smaller the frequency region of stochastic entrainment – in line with intuition, noise acts to break down synchronization. The strength of the noise effect in controlling the boundary of the synchronized region is not symmetrical around F – thus noise can effectively shift, as well as shrink the synchronized frequency band.

In conclusion, the synaptic phase-resetting function of FS cells firing at gamma frequencies, as characterized here, is very well-suited to achieving rapid synchronization, and demonstrates complementary roles of the two types of synaptic connection in determining the frequency range of synchronization. It provides a simple yet surprisingly accurate model for predicting synchronization of these cells, and should be a useful component in network models aimed at understanding the complex spatiotemporal properties of locally-synchronized gamma-frequency firing in the cortex.

Methods

Slice preparation and electrophysiological recording

300 μ m sagittal slices of somatosensory cortex were prepared from postnatal day 13–19 Wistar rats, using a vibratome (DSK Microslicer Zero 1, Dosaka EM, Kyoto), in chilled solution composed of (in mM): 125 NaCl, 25 NaHCO₃, 2.5 KCl, 1.25 NaH₂PO₄, 2 CaCl₂, 1 MgCl₂, and 25 glucose, oxygenated with 95% O₂, 5% CO₂ gas. Slices were then held at room temperature for at least 30 minutes before recording. The tissue was visualized with an Olympus BX50WI upright microscope (Olympus UK, London) using infrared differential interference contrast videomicroscopy. During recording, slices were perfused with oxygenated solution identical to the slicing solution, at 31–35°C (8 cells analysed in detail) or 23°C (4 cells). 10 μ M 2-(3-carboxypropyl)-3-amino-6-(4-methoxyphenyl)-pyridazinium bromide (SR95531; gabazine), 10 μ M D-2-amino-5-phosphonopentanoic acid (AP5), and 10 μ M 6-cyano-7-nitroquinoxaline-2,3-dione (CNQX) were usually added, to block chemical synaptic transmission mediated by GABA_A, N-methyl-D-aspartic acid (NMDA), and α -amino-3-hydroxy-5-methyl-4-isoxazole propionic acid (AMPA) receptors, respectively. Whole-cell recordings were made from the somas of nonpyramidal neurons in cortical layers 2/3, 4, and 5. Cells identified as FS neurons had a mean input resistance of 202 ± 87 M Ω ($n = 12$). Data from 10 fast-spiking neurons (taken from 8 animals) were used for analysis, with a further 12 cells

showing consistent results, but which were not complete enough for analysis. The number of synaptic phase-resetting functions with different parameters of the conductance perturbations (see below) which could be constructed for each cell was limited by the lifetime of the recording, typically 20 to 40 minutes.

Patch pipettes of 3–5 M Ω resistance were pulled from borosilicate capillary glass and filled with an intracellular solution containing (in mM): 105 K-gluconate, 30 KCl, 10 HEPES, 10 phosphocreatine, 4 ATP, 4 MgCl₂, and 0.3 GTP, adjusted to pH 7.3 with KOH. Current-clamp recordings were performed using an Axon Multiclamp 700A or in a few cases, an Axopatch 200A amplifier (Axon Instruments, Foster City, CA). Membrane potentials were corrected for nulling of the liquid junction potential before seal formation. Signals were filtered with a four-pole low-pass Bessel filter at –3dB cutoff frequency of 5 kHz, sampled at 20 kHz, and recorded with custom software written in MATLAB (The Mathworks, Natick, MA).

Conductance injection

Recorded neurons were stimulated using artificial conductance injection [25,26,48]. An effective conductance is inserted in the recorded cell by injecting a current I according to Ohm's law, $I = g(V - E_{rev})$, where g is the conductance, V is the membrane potential of the cell, and E_{rev} is the reversal potential of the conductance. A conductance injection amplifier [49] or digital signal processing system (SM-1 or SM-2, Cambridge Conductance, Cambridge, UK) [50] with response times of less than 200 ns or 10 μ s respectively, were used to calculate and produce the current command signal in real time for the current-clamp amplifier.

Steady trains of action potentials at gamma frequencies were elicited by steps of AMPA-receptor like ohmic conductance, reversing at 0 mV, to which perturbing conductances were added as follows. Stimuli that mimicked action potentials filtered through electrical synapses were generated. An action potential (AP) waveform was produced using a conductance-based model of an FS cell, identical to that of [41], except that the leak conductance was reduced to better fit the stimulus-response curves of actual FS cells (see **Fast-spiking cell conductance-based model (section below)**).

This AP waveform was then used as the time-varying E_m signal for a constant conductance g , representing the electrical synapse. The conductance of a unitary synaptic GABA event was modelled as a difference of exponentials $g(t) = g_i[\exp(-t/\tau_2) - \exp(-t/\tau_1)]$, where g_i is the scaling amplitude of the inhibitory conductance, and τ_2 was 7 ms, and τ_1 was 0.5 ms. In compound stimuli, the start of the GABA event was delayed by 3 ms from the start of the simulated action potential to represent synaptic latency. The reversal potential E_{GABA} was usually set to –55 mV [29].

Data analysis

Spike times were determined as the times of positive-going threshold crossings of the membrane potential at a threshold set at 10 mV below the peak of action potentials. The phase at which a stimulus was applied was calculated from the time elapsed from the preceding spike, relative to the unperturbed firing period. Variability of phase was characterized by the phase order parameter, or synchrony $S = \sqrt{\langle \cos^2(\phi) \rangle + \langle \sin^2(\phi) \rangle}$, which varied between 0 (phases distributed uniformly between 0 and 2π) and 1 (phases all identical). The change in phase ($\Delta\phi$) caused by a stimulus was calculated as follows. Let ϕ be the phase reached at the moment of perturbation, ϕ' the phase immediately after, t_p the time after the *previous* spike at which the perturbation is applied, t_n the time elapsed after the perturbation before the *next* spike,

and T_0 the average interspike interval. Then $\phi = 2\pi t_p/T_0$, $\phi' = 2\pi(1 - t_n/T_0)$ and $\Delta\phi = \phi' - \phi$.

Fitting and simulations

The synaptic phase-resetting function (SPRF, see Fig. 2) was approximated by the piecewise linear relationship:

$$\Delta\phi(\varphi) = \begin{cases} -\alpha\varphi & (0 \leq \varphi < \varphi_c) \\ \beta(2\pi - \varphi) & (\varphi_c \leq \varphi < 2\pi) \end{cases} \quad (1)$$

where conductance values are in nS, $-\alpha$ is the slope in the phase advance section, $-\beta$ is the slope of the phase delay section, and φ_c is the breakpoint. SPRFs were fitted to experiments by least-squares, and using Grubbs' test for outliers, to delete occasional outlying points (in most cases none, but no more than three per SPRF).

Entrainment of periodic spiking to periodic stimulation was simulated by the noisy map describing the evolution of the phase from stimulus n to stimulus $n+1$:

$$\varphi_{n+1} = G(\varphi_n) = \varphi_n + \Delta\phi(\varphi_n) + 2\pi F/f + \xi_n \pmod{2\pi} \quad (2)$$

where f is the stimulus angular frequency, F is the unperturbed (natural) angular frequency of the cell, and ξ_n is a Gaussian-distributed noise term, with variance σ^2 . The biophysical simulations of Fig. 7 were carried out using the model specified by [41], modified slightly as described above (see **Conductance injection**).

Bifurcation analysis

Bifurcation points, where 1:1 entrained fixed points of the map given by Eq. 2 appear, were solved for directly. To determine the points of stochastic bifurcation, we used the definition of [32]. The stochastic map of the phase between successive stimuli on a unit circle S is represented by a Markov operator p on the phase distribution, where $p(\phi|\phi_0)$ is the conditional probability density function of the phase at stimulus $i+1$, given a phase of ϕ_0 at stimulus i .

$$p(\phi|\phi_0) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma}} \exp\left(-\frac{(\phi - G(\phi_0))^2}{\sigma^2}\right) \pmod{2\pi},$$

and the distribution of phase $h(\phi)$ advances from stimulus n to stimulus $n+1$ according to:

$$h_{n+1}(\phi) = \int_S p(\phi|\phi_0) h_n(\phi) d\phi_0 \pmod{2\pi}.$$

p is approximated by a stochastic transition matrix, and the onset of stochastic entrainment is defined by the point where the second eigenvalue of this stochastic transition matrix changes from real to complex. This definition of a stochastic bifurcation coincides with the deterministic case as the noise level approaches zero, is clearly defined even when the steady-state phase distribution hardly changes, and incorporates the dynamics of the phase: the first

eigenfunction gives the stationary or invariant distribution of the phase, while the second eigenfunction can be thought of as forming the principal component of the average time course of relaxations from an initial random phase distribution.

Fast-spiking cell conductance-based model

A model of fast-spiking cell membrane potential (V) dynamics was used (as above for generating action potentials for gap-junctional stimulation) which was slightly modified, with a different leak conductance, from that specified in Erisir et al., 1999 [41] (also correcting typographical errors in the published description of the model). Sodium (Na), Kv1 (K1) and Kv3 type potassium and static leak (L) conductances were used in a single electrical compartment of capacitance C , as follows (units of mV for voltage, ms^{-1} for rates):

$$\frac{dV}{dt} = \frac{\bar{g}_{Na}m^3h(E_{Na}-V) + (\bar{g}_{K1}n^4 + \bar{g}_{K3}p^2)(E_K-V) + g_L(E_L-V)}{C}$$

$$\frac{dx}{dt} = \alpha_x(V)(1-x) - \beta_x(V)x, \text{ for } x \in \{m, h, n, p\}, \text{ where}$$

$$\alpha_m(V) = (3020 - 40V) / (\exp((-75.5 + V)/-13.5) - 1),$$

$$\beta_m = 1.2262 / \exp(V/42.248)$$

$$\alpha_h(V) = 0.0035 / \exp(V/24.186),$$

$$\beta_h(V) = -(0.8712 + 0.017V) / (\exp((51.25 + V)/-5.2) - 1)$$

$$\alpha_n(V) = -(0.616 + 0.014V) / (\exp((44 + V)/-2.3) - 1),$$

$$\beta_n(V) = 0.0043 / \exp((44 + V)/34)$$

$$\alpha_p(V) = (95 - V) / (\exp((-95 + V)/-11.8) - 1),$$

$$\beta_p(V) = 0.025 / \exp(V/22.222)$$

$$C = 8.04 \text{ pF}, \bar{g}_{Na} = 900 \text{ nS}, \bar{g}_{K1} = 1.8 \text{ nS}, \bar{g}_{K3} = 1800 \text{ nS},$$

$$g_L = 4.1 \text{ nS}, E_L = -70 \text{ mV}, E_K = -90 \text{ mV}, E_{Na} = 60 \text{ mV}.$$

Exactly the same conductance stimuli were applied to the model as to cells experimentally (see **Conductance injection** section above).

Supporting Information

Figure S1 An example of the lack of phase shift in the cycle following that in which a strong perturbation is applied (second-order resetting). $F = 61 \text{ Hz}$, $g_e = 0.4 \text{ nS}$, $g_i = 2 \text{ nS}$. Dashed lines indicate expected standard deviation if there is no second order effect.

Found at: doi:10.1371/journal.pcbi.1000951.s001 (0.09 MB TIF)

Author Contributions

Conceived and designed the experiments: NWG TT KA HPCR. Performed the experiments: NWG HZ. Analyzed the data: NWG HZ KT HPCR. Wrote the paper: HPCR.

References

1. Buzsaki G, Draguhn A (2004) Neuronal oscillations in cortical networks. *Science* 304: 1926–1929.
2. Singer W (1999) Neuronal synchrony: a versatile code for the definition of relations? *Neuron* 24: 49–65.
3. Fisahn A, Pike FG, Buhl EH, Paulsen O (1998) Cholinergic induction of network oscillations at 40 Hz in the hippocampus in vitro. *Nature* 394: 186–189.
4. Whittington MA, Traub RD, Jefferys JG (1995) Synchronized oscillations in interneuron networks driven by metabotropic glutamate receptor activation. *Nature* 373: 612–615.
5. Whittington MA, Stanford IM, Colling SB, Jefferys JG, Traub RD (1997) Spatiotemporal patterns of gamma frequency oscillations tetanically induced in the rat hippocampal slice. *J Physiol* 502(Pt 3): 591–607.

6. Cardin JA, Carlen M, Meletis K, Knoblich U, Zhang F, et al. (2009) Driving fast-spiking cells induces gamma rhythm and controls sensory responses. *Nature* 459: 663–667.
7. Hasenstaub A, Shu Y, Haider B, Kraushaar U, Duque A, et al. (2005) Inhibitory postsynaptic potentials carry synchronized frequency information in active cortical networks. *Neuron* 47: 423–435.
8. Morita K, Kalra R, Aihara K, Robinson HPC (2008) Recurrent Synaptic Input and the Timing of Gamma-Frequency-Modulated Firing of Pyramidal Cells during Neocortical “UP” States. *J Neurosci* 28: 1871–1881.
9. Lytton WW, Sejnowski TJ (1991) Simulations of cortical pyramidal neurons synchronized by inhibitory interneurons. *J Neurophysiol* 66: 1059–1079.
10. Vida I, Bartos M, Jonas P (2006) Shunting inhibition improves robustness of gamma oscillations in hippocampal interneuron networks by homogenizing firing rates. *Neuron* 49: 107–117.
11. White JA, Chow CC, Ritt J, Solo-Trevino C, Kopell N (1998) Synchronization and oscillatory dynamics in heterogeneous, mutually inhibited neurons. *J Comput Neurosci* 5: 5–16.
12. Galarreta M, Hestrin S (1999) A network of fast-spiking cells in the neocortex connected by electrical synapses. *Nature* 402: 72–75.
13. Gibson JR, Beierlein M, Connors BW (1999) Two networks of electrically coupled inhibitory neurons in neocortex. *Nature* 402: 75–79.
14. Tamas G, Buhl EH, Lorinz A, Somogyi P (2000) Proximally targeted GABAergic synapses and gap junctions synchronize cortical interneurons. *Nat Neurosci* 3: 366–371.
15. Bacci A, Huguenard JR (2006) Enhancement of spike-timing precision by autaptic transmission in neocortical inhibitory interneurons. *Neuron* 49: 118–130.
16. Tateno T, Harsch A, Robinson HP (2004) Threshold firing frequency-current relationships of neurons in rat somatosensory cortex: type 1 and type 2 dynamics. *J Neurophysiol* 92: 2283–2294.
17. Tateno T, Robinson HPC (2008) Integration of broadband conductance input in rat somatosensory cortical inhibitory interneurons: an inhibition-controlled switch between intrinsic and input-driven spiking in fast-spiking cells. *J Neurophysiol* 101: 1056–1072.
18. Traub RD (2001) Gap junctions between interneuron dendrites can enhance synchrony of gamma oscillations in distributed networks. *J Neurosci* 21: 9478–9486.
19. Bartos M (2002) Fast synaptic inhibition promotes synchronized gamma oscillations in hippocampal interneuron networks. *Proc Natl Acad Sci U S A* 99: 13222–13227.
20. Kopell N, Ermentrout GB (2004) Chemical and electrical synapses perform complementary roles in the synchronization of interneuronal networks. *Proc Natl Acad Sci U S A* 101: 15482–15487.
21. Rinzel JM, Ermentrout GB (1998) Analysis of neuronal excitability. In: CK, Segev I, eds. *Methods in Neuronal Modelling*. Cambridge MA: MIT Press.
22. Pikovsky A, Rosenblum M, Kurths J (2001) *Synchronization: a universal concept in nonlinear sciences*. Cambridge: Cambridge University Press.
23. Kawaguchi Y, Kubota Y (1993) Correlation of physiological subgroupings of nonpyramidal cells with parvalbumin- and calbindinD28k-immunoreactive neurons in layer V of rat frontal cortex. *J Neurophysiol* 70: 387–396.
24. Kawaguchi Y, Kubota Y (1997) GABAergic cell subtypes and their synaptic connections in rat frontal cortex. *Cereb Cortex* 7: 476–486.
25. Robinson HPC, Kawai N (1993) Injection of digitally synthesized synaptic conductance transients to measure the integrative properties of neurons. *J Neurosci Methods* 49: 157–165.
26. Sharp AA, O’Neil MB, Abbott LF, Marder E (1993) Dynamic clamp: computer-generated conductances in real neurons. *J Neurophysiol* 69: 992–995.
27. Amitai Y, Gibson JR, Beierlein M, Patrick SL, Ho AM, et al. (2002) The spatial dimensions of electrically coupled networks of interneurons in the neocortex. *J Neurosci* 22: 4142–4152.
28. Galarreta M, Hestrin S (2001) Electrical synapses between GABA-releasing interneurons. *Nature Rev Neurosci* 2: 425–433.
29. Martina M, Royer S, Pare D (2001) Cell-type-specific GABA responses and chloride homeostasis in the cortex and amygdala. *J Neurophysiol* 86: 2887–2895.
30. Guldedge AT, Stuart GJ (2003) Excitatory actions of GABA in the cortex. *Neuron* 37: 299–309.
31. Di Bernardo M, Budd CJ, Champneys AR (2001) Grazing and border-collision in piecewise-smooth systems: a unified analytical framework. *Phys Rev Lett* 86: 2553–2556.
32. Inoue J, Doi S, Kumagai S (2001) Numerical analysis of spectra of the Frobenius-Perron operator of a noisy one-dimensional mapping: Toward a theory of stochastic bifurcations. *Phys Rev E Stat Nonlin Soft Matter Phys* 64: 056219.
33. Ermentrout GB, Kopell N (1991) Multiple pulse interactions and averaging in systems of coupled neural oscillators. *J Math Biology* 29: 195–217.
34. Reyes AD, Fetz EE (1993) Two modes of interspike interval shortening by brief transient depolarizations in cat neocortical neurons. *J Neurophysiol* 69: 1661–1672.
35. Stoop R, Schindler K, Bunimovich LA (2000) When pyramidal neurons lock, when they respond chaotically, and when they like to synchronize. *Neurosci Res* 36: 81–91.
36. Netoff TL, Banks MI, Dorval AD, Acker CD, Haas JS, et al. (2005) Synchronization in hybrid neuronal networks of the hippocampal formation. *J Neurophysiol* 93: 1197–1208.
37. Mancilla JG, Lewis TJ, Pinto DJ, Rinzel J, Connors BW (2007) Synchronization of electrically coupled pairs of inhibitory interneurons in neocortex. *J Neurosci* 27: 2058–2073.
38. Hu H, Martina M, Jonas P (2009) Dendritic mechanisms underlying rapid synaptic activation of fast-spiking hippocampal interneurons. *Science* 327: 52–58.
39. Martina M, Vida I, Jonas P (2000) Distal initiation and active propagation of action potentials in interneuron dendrites. *Science* 287: 295–300.
40. Galarreta M, Hestrin S (2002) Electrical and chemical synapses among parvalbumin fast-spiking GABAergic interneurons in adult mouse neocortex. *Proc Natl Acad Sci U S A* 99: 12438–12443.
41. Erisir A, Lau D, Rudy B, Leonard CS (1999) Function of specific K(+) channels in sustained high-frequency firing of fast-spiking neocortical interneurons. *J Neurophysiol* 82: 2476–2489.
42. Gutkin BS, Ermentrout GB, Reyes AD (2005) Phase-response curves give the responses of neurons to transient inputs. *J Neurophysiol* 94: 1623–1635.
43. Ermentrout B, Wechselberger M (2009) Canards, clusters and synchronization in a weakly coupled interneuron model. *SIAM J Applied Dynamical Systems* 8: 253–278.
44. Tateno T, Robinson HP (2007) Phase resetting curves and oscillatory stability in interneurons of rat somatosensory cortex. *Biophys J* 92: 683–695.
45. Yoshimura Y, Callaway EM (2005) Fine-scale specificity of cortical networks depends on inhibitory cell type and connectivity. *Nat Neurosci* 8: 1552–1559.
46. Bennett MV, Zukin RS (2004) Electrical coupling and neuronal synchronization in the Mammalian brain. *Neuron* 41: 495–511.
47. Holt GR, Softky WR, Koch C, Douglas RJ (1996) Comparison of discharge variability in vitro and in vivo in cat visual cortex neurons. *J Neurophysiol* 75: 1806–1814.
48. Destexhe A, Bal T, eds (2009) *Dynamic-Clamp: From Principles to Applications*. Springer.
49. Robinson HPC (1998) Analog circuits for injecting time-varying linear and nonlinear (NMDA-type) conductances into neurons. *J Physiol* 518P: 9–10.
50. Robinson HPC (2008) A scriptable DSP-based system for dynamic conductance injection. *J Neurosci Methods* 169: 271–281.

A small-conductance Ca^{2+} -dependent K^{+} current regulates dopamine neuron activity: a combined approach of dynamic current clamping and intracellular imaging of calcium signals

Takashi Tateno

To analyze the small-conductance calcium-dependent K^{+} current observed in dopaminergic neurons of the rat midbrain, we have developed a new dynamic current clamping method that incorporates recording of intracellular Ca^{2+} levels. As reported earlier, blocking the small-conductance current with apamin shifted the firing modes of dopaminergic neurons and changed the firing rate and spike afterhyperpolarization. We modeled the kinetic properties of the current and assessed the model in a real-time computational system. Here, we show that the spike afterhyperpolarization is regulated by the small-conductance current, an effect that is observed in dopaminergic neurons. Thus, this current can effectively shape the autonomous firing patterns of dopaminergic

neurons. *NeuroReport* 21:667–674 © 2010 Wolters Kluwer Health | Lippincott Williams & Wilkins.

NeuroReport 2010, 21:667–674

Keywords: action potential, dynamic clamp, intracellular calcium, rat midbrain, spike after hyperpolarization, whole-cell patch-clamp recording

Osaka University, Toyonaka-shi, Osaka, Japan

Correspondence to Dr Takashi Tateno, PhD, PRESTO, Japan Science and Technology Agency, 4-1-8 Honcho, Kawaguchi, Saitama, Japan

Present address: Takashi Tateno, Department of Mechanical Science and Bioengineering, Graduate School of Engineering Science, Osaka University, 1-3, Machikaneyama, Toyonaka, Osaka, 560-8531 Japan

Received 3 April 2010 accepted 11 April 2010

Introduction

Dopaminergic (DA) neurons are integral to a wide variety of behaviors, including reward-based learning [1], cognition [2], and motor control [3]. Although recent studies have provided significant insights into the properties of ion channels in in-vitro preparations [4], the roles of distinct ion channels in controlling the frequency and regularity of the various discharge modes of DA midbrain neurons have not yet been systematically studied in awake, behaving animals. Several types of Ca^{2+} channels – for example, L-type, N-type, P/Q-type, and T-type channels – are expressed in DA neurons [5,6]. $\text{Ca}_v1.3$ L-type channels [7–9] are important for autonomous firing of DA neurons, where they activate at relatively negative potentials compared with the $\text{Ca}_v1.2$ channels [10]. Subthreshold activation of T-type and N-type Ca^{2+} channels results in the activation of an apamin-sensitive small-conductance (SK)-mediated current, which contributes medium afterhyperpolarization [11–13]. The medium afterhyperpolarization activates rapidly and decays over several hundred milliseconds, whereas slow afterhyperpolarizations, which can typically last over several hundred milliseconds to several seconds [14], are coupled to P-type and L-type Ca^{2+} channels [15] as well as SK channels. The blockade of this SK current leads to long-duration, Ca^{2+} -dependent plateau potentials [12,16].

Since its introduction [17,18], the dynamic clamp technique has slowly become a standard technique for

performing cellular electrophysiological analysis. The dynamic clamp involves injecting conductance into an intracellularly recorded cell. As the current is the product of the conductance and the membrane potential, which itself changes as current is injected, the injected current must be continuously updated as a function of the membrane potential of the recorded cell. Therefore, a real-time loop needs to be established between the device that produces the current and the recorded membrane potential. The applications of this technique have expanded from studies of single neuron properties [19] to the creation of hybrid networks that combine biological and simulated neurons [20]. Despite the wealth of physiological and pathophysiological information about the role of the intracellular calcium concentration $[\text{Ca}^{2+}]_i$ in neuronal functions, however, no attempts to link the measured $[\text{Ca}^{2+}]_i$ to a dynamic clamp recording directly have been reported to date. In this study, we propose a new dynamic clamp technique in which the $[\text{Ca}^{2+}]_i$ measured using fluorescence imaging is incorporated into the conventional dynamic clamp protocol. Here, we report that the frequency of action potentials in the midbrain DA neurons is profoundly influenced by the SK Ca^{2+} -dependent K^{+} current. We also use the new method to inject an artificial SK current and characterize the effects on DA neuron activity.

Methods

Slice preparation

Slices of the basal ganglia were obtained from P15–P18 Wistar rats. The animals were anesthetized and decapitated.

Supplemental digital content is available for this article. Direct URL citations appear in the printed text and are provided in the HTML and PDF versions of this article on the journal's Website (www.neuroreport.com).

0959-4965 © 2010 Wolters Kluwer Health | Lippincott Williams & Wilkins

DOI: 10.1097/WNR.0b013e32833add56

The brain was placed in artificial cerebral spinal fluid (ACSF) consisting of 125 mM NaCl, 2.5 mM KCl, 25 mM NaHCO₂, 25 mM glucose, 1.25 mM NaH₂PO₄, 2 mM CaCl₂, and 1 mM MgCl₂, in which bubbles of 95% O₂/5% CO₂ were used to obtain a pH of 7.4. The basal ganglia were mounted on a vibratome and cut into 300-μm-thick coronal slices. The slices, including the substantia nigra pars compacta (SNc) and the lateral part of the ventral tegmental area (VTA), were incubated in ACSF at 32°C for at least 1 h before recording. All procedures were approved by Osaka University and complied with the NIH Guidelines on Animal Use.

Electrophysiology

Basal ganglia slices were placed in a recording chamber perfused with ACSF containing 100 μM picrotoxin or 10 μM gabazine (Sigma-Aldrich; St Louis, Missouri, USA), 10 μM CNQX, and 10 μM AP5 (Tocris Cookson, Bristol, UK) to prevent synaptic transmission. The samples were maintained at 34 ± 2°C. The slices were visualized using an Olympus BW60WI microscope and DA neurons in the SNc and the lateral part of the VTA were identified using a 60 × water immersion objective lens. All the recorded neurons were subjected to immunocytochemical detection of tyrosine hydroxylase to confirm that they were DA neurons. Glass pipette electrodes were pulled from borosilicate glass (Clark GC150F-5) and were filled with an intracellular solution consisting of 105 mM K gluconate, 30 mM KCl, 10 mM HEPES, 10 mM phosphocreatine Na₂, 4 mM ATP-Mg, 0.3 mM Na-GTP, and 5 mg/ml biocytin (adjusted to pH 7.3 using KOH). Whole-cell patch clamp recordings were made using a Multiclamp 700B amplifier (Molecular Devices, Sunnyvale, California, USA). To block the SK current, 10–100 nM apamin (Sigma-Aldrich) was added to the perfusion solution. Current clamp recordings were sampled at 20 kHz using an NI PCI-6259 DAQ card (National Instruments, Austin, Texas, USA) and custom data acquisition software written in MATLAB (Mathworks, Natick, Massachusetts, USA).

Ca²⁺ imaging

Ratiometric and single-wavelength measurements of fluorescence at 340 and/or 380 nm were made using a fluorescence microscopy camera, EXi blue (Q Imaging, Surrey, British Columbia, Canada), and a dye fura-2 (Molecular Probes, Eugene, Oregon, USA). Frame rates of 50–80 per second were used, depending on the size of the field of view. The measurements were made at the position in which the main proximal dendrite connected to the soma of the DA neuron. For each trial, fluorescence values at 340 and 380 nm were first converted to the calcium concentration at rest as described earlier [21], whereas, in some experiments, the membrane was hyperpolarized to prevent oscillations in the current clamp mode. Subsequent changes in fluorescence at 380 nm were then converted into [Ca²⁺]_i using a formula that

was reported earlier (see also Appendix A in the Supplemental digital information, Supplemental digital content 1, <http://links.lww.com/WNR/A56>) [22]. Calculation of the [Ca²⁺]_i was carried out in real time using a digital signal processor (sBOX, MTT, Tokyo, Japan). The fura-2 concentration in the cell was assumed to be 0 μM just before the electrode broke into the cell and 100 μM (concentration in the electrode) at steady state. The concentration at any time could then be extrapolated from the filling curve described by Foehring *et al.* [23].

Dynamic current clamp

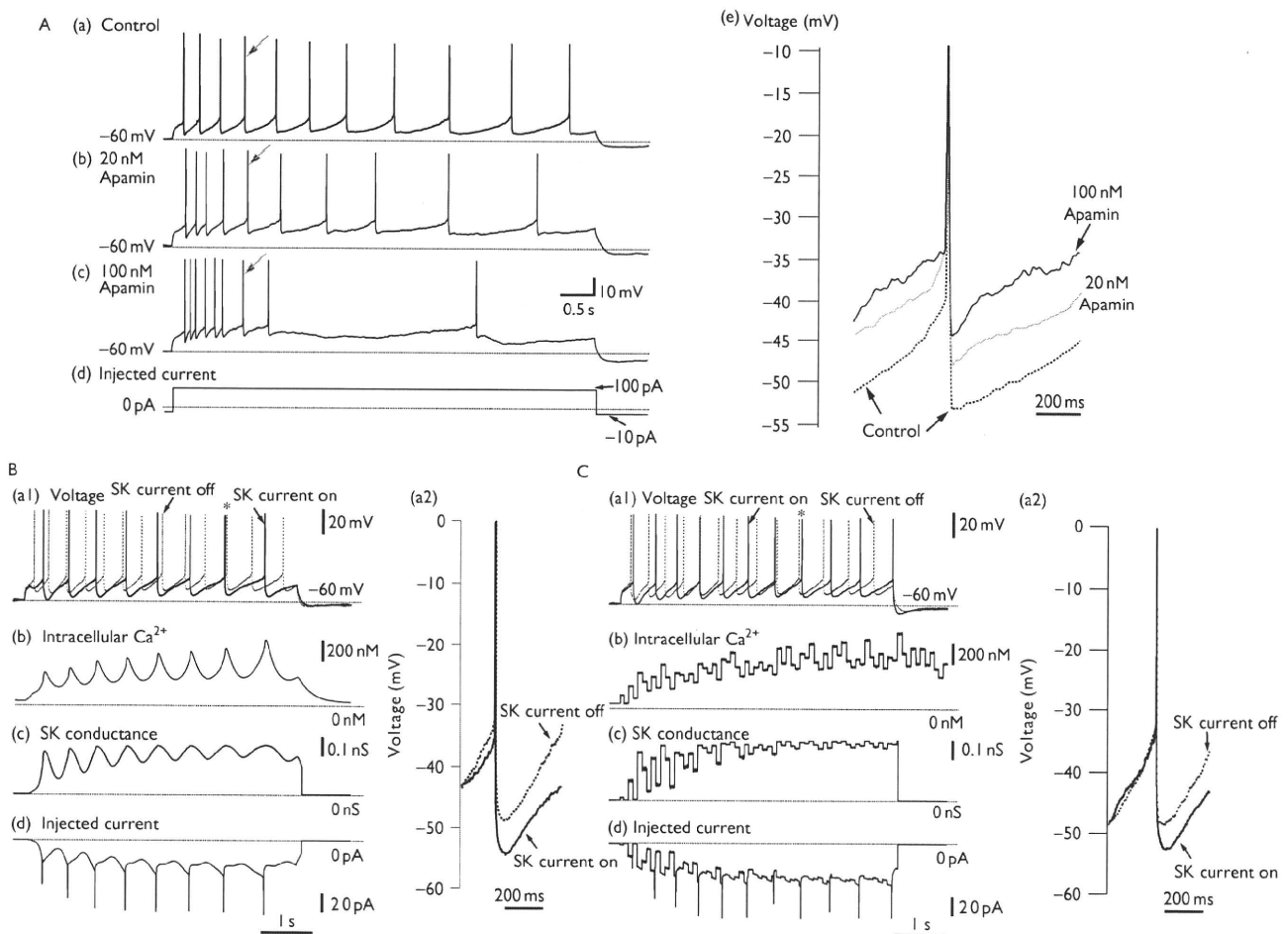
The dynamic current clamp was used to produce artificial SK conductance in DA neurons after apamin treatment. As SK conductance is calcium-dependent, we had to measure the [Ca²⁺]_i directly, or simulate a calcium pool and calcium flow into this pool in real time based on the voltage trajectory of the recorded neuron. For the latter, the calcium inflow in our model was mediated by L-type, N-type, P-type, and T-type voltage-dependent calcium currents that were simulated using Hodgkin–Huxley kinetics and were linked in real time to the recorded voltage (see Appendix B in the Supplemental digital information, Supplemental digital content 1, <http://links.lww.com/WNR/A56>). In the model, we selected types of voltage-dependent calcium currents and their kinetics on the basis of a series of DA neuron models proposed by Canavier *et al.* [24,25]. Some parameters in the model were modified by using data of recent studies ([5]; see also Appendix B in the Supplemental digital information, Supplemental digital content 1, <http://links.lww.com/WNR/A56>). Calcium outflow governed the signal decay and the SK current was determined using the Hill equation-based calcium-binding activation and the time course of the measured or simulated [Ca²⁺]_i. The equations used (in the dynamic clamp are listed in the Supplemental digital information, Supplemental digital content 1, <http://links.lww.com/WNR/A56>) and were implemented in the digital signal processor with custom-made programs written using Code Composer Studio 3.1 (Texas Instruments, Dallas, Texas, USA).

The results are reported as mean ± SD. Statistical analysis was performed using Student's *t*-test, and *P* value of less than 0.05 was considered to be significant.

Results

We recorded and imaged 48 DA neurons in the SNc and eight DA neurons in the lateral part of the VTA (total 37 animals). Each of the DA neurons showed spontaneous firing at 1.97 ± 0.23 Hz (mean ± SD). In some experiments, the membrane was hyperpolarized before obtaining evoked responses to prevent oscillations in the current clamp mode (see Methods section). We obtained a membrane voltage trace based on an injected current step pulse (100 pA) before and after the application of 20 or 100 nM apamin (Fig. 1A). For nine and eight DA

Fig. 1



A, Apamin effects on the firing properties of a dopaminergic (DA) neuron. In response to a current step of 100 pA from -10 pA, repetitive firing was observed in (a) control, (b) 20 nM apamin, and (c) 100 nM apamin conditions. The injected current is shown in (d). In (e), an expanded view of the action potentials indicated by arrows in (a), (b), and (c) and the afterhyperpolarizations (AHPs) are shown. B, In the presence of 20 nM apamin, injection of small-conductance (SK) current simulated from the recorded membrane voltage mimicked and restored AHP waveforms. Results are shown for the (a) membrane voltage, (b) $[Ca^{2+}]_i$ computed from a mathematical model that incorporated the recorded voltage, (c) the SK value, and (d) the injected SK current. In (a2), an expanded view of the action potentials indicated by an asterisk in (a1) and the AHPs are shown. C, Similar traces to those shown in B, except that the $[Ca^{2+}]_i$ was estimated using fluorescence imaging.

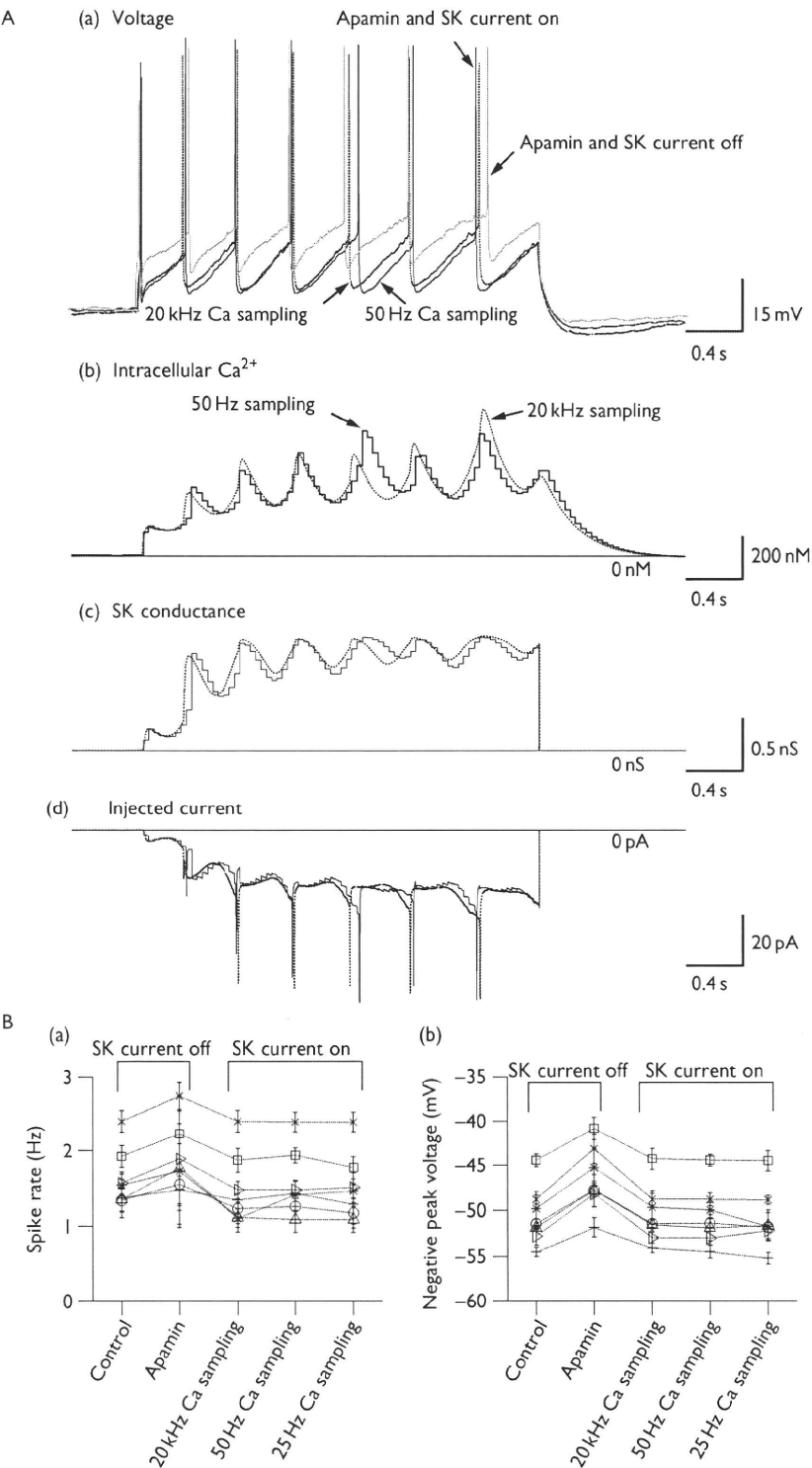
neurons in the SNc and the lateral part of the VTA, respectively, irregular bursting appeared in the presence of 100 nM apamin [Fig. 1A(c)], whereas regular single spiking was evoked in control samples or in neurons treated with less than 30 nM apamin. In 100 nM apamin, the negative voltage peak following each spike increased (-45.4 ± 1.9 vs. -53.7 ± 0.68 mV in control samples, $P < 0.001$), such that the afterhyperpolarization (AHP) was smaller. In other words, if the AHP was smaller, the minimum membrane potential reached was less negative, so that it increased in the presence of apamin, as shown in Fig. 1A(e). In addition, the peak amplitude of each spike was reduced (12.3 ± 0.8 vs. 14.4 ± 0.7 mV in control samples, $P < 0.01$).

In the presence of 20 nM apamin, the artificial SK current injection rescued the AHP or the minimum membrane potential reached, and the negative voltage peak after

each spike was reduced and more hyperpolarized, so that the minimum membrane potentials decreased (-58.3 ± 2.5 mV); the negative peak value without the SK current was -52.8 ± 3.1 mV [Fig. 1B(a) and C(a)]. Moreover, the simulated and measured $[Ca^{2+}]_i$ is also shown in Fig. 1B(b) and C(b), respectively. The average changes in the transient $[Ca^{2+}]_i$ estimated using fluorescence imaging were similar to those observed for the transient $[Ca^{2+}]_i$ simulated using the recorded membrane voltage. Owing to a limited time resolution, however, fine oscillatory changes during evoked responses were not easily observed using the present imaging system [Fig. 2C(b)].

On the bases of the changes in the $[Ca^{2+}]_i$, the SK conductance was directly calculated using a Hill equation-based calcium-binding activation formula (Hill coefficient

Fig. 2



A, (a) Effects of different sampling rates in the calcium dynamics model on the firing properties of a dopaminergic (DA) neuron. In response to a current step of 100 pA from -10 pA, repetitive firing was observed before and after small-conductance (SK) current was injected while the endogenous SK current was blocked (30 nM apamin treatment). Results at 20 kHz and 50 Hz Ca sampling are shown for the (a) membrane voltage, (b) $[Ca^{2+}]_i$, computed from a mathematical model that incorporated the recorded voltage, (c) the SK value, and (d) the injected SK current. (b) Spike statistics at three different sampling rates (20 000, 50, and 25 Hz) in the calcium dynamics model for three and four DA neurons in the substantia nigra pars compacta and the ventral tegmental area, respectively. B, Results of spike rate in (a) and negative peak voltage following each spike in (b) are shown in a control condition before SK current was injected and 30 nM apamin treatment conditions before and after SK current was injected. Error bars indicate standard deviations.

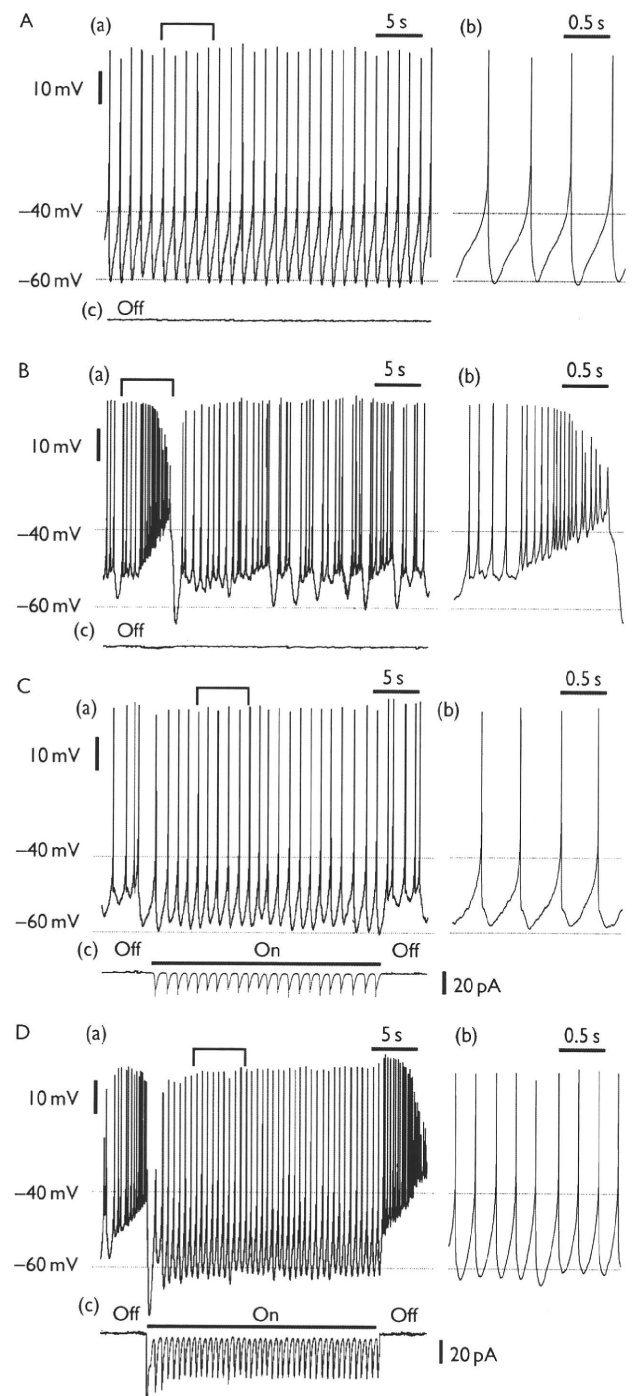
$n = 4$): $\bar{g}_{SK}([Ca^{2+}]_i) = \bar{g}_{SK}[Ca^{2+}]_i^4 / ([Ca^{2+}]_i^4 + K_m^4)$, where \bar{g}_{SK} and K_m are the maximum SK value and dissociation constant, respectively [Fig. 1B(c) and C(c)]. Moreover, in the presence of apamin, the dynamic clamp stimulated a pulsatile SK current in each spike with a subsequent slow transient [Fig. 1B(d) and C(d)]. For the SK value obtained using fluorescence imaging of $[Ca^{2+}]_i$ changes, the oscillatory phase observed in Fig. 1C(d) was not easily identified, although the observed trend was similar to that simulated using the computational model [Fig. 1B(d)]. The decay time for the SK current was dominated by the time courses of the membrane voltage changes between spikes and calcium outflow during the early phase of the evoked responses. During the late phase, the time course of the membrane voltage changes mediated the fast transient because of calcium accumulation.

In our imaging system, it was impossible to increase the imaging rate (e.g. > 80 frames/s) for the intracellular Ca^{2+} measurements sufficiently to test the model in which the recorded membrane voltage was sampled at 20 kHz. Therefore, to test the calcium dynamics model, we used a lower resolution at a sampling rate of less than 50 Hz, which was comparable to that of the fluorescence data. In the calcium dynamics model at sampling rates of 20 kHz and 50 Hz, Fig. 2A(a)–(d) shows four traces of membrane voltage, simulated $[Ca^{2+}]_i$, SK conductance, and an injected current, respectively. Between the two sampling rates, for three and four DA neurons in the SNc and VTA, respectively, there were no significant differences in the average spike rate and the negative peak voltage following each spike or AHP, as shown in Fig. 2B(a) and (b).

From the result mentioned above, the sampling rates in the calcium dynamics model had little influence on the spike rate and AHP of DA neurons. Thus, the model is valid for replacing $[Ca^{2+}]_i$ measured by calcium imaging with the computed $[Ca^{2+}]_i$. In the following, therefore, SK conductance was generated from the model of calcium dynamics.

All the neurons recorded in this study showed altered spontaneous firing properties after SK current block with 100 nM apamin (Fig. 3B), compared with the baseline activity (Fig. 3A). After apamin treatment, the AHP disappeared or was reduced (i.e. the minimum membrane potential reached was increased) during both spontaneous firing and evoked responses. In the presence or absence of apamin, the negative peak amplitude after each spike was -62.3 ± 1.2 mV ($\bar{g}_{SK} = 200$ nS) or -57.6 ± 1.5 mV ($\bar{g}_{SK} = 0$), respectively. Elimination of the AHP with apamin led to pronounced burst activity in most neurons (Fig. 3B). In those neurons, interspike intervals (ISIs; 0.31 ± 0.25 s) during the burst were shorter than baseline ISIs (0.71 ± 0.11 s), and the number of spikes in each burst varied [Fig. 3B(b)].

Fig. 3



Spontaneous spiking activity in control samples, samples treated with apamin, and in the presence of injected small-conductance (SK) current. A, (a) Baseline spiking at 2.1 Hz in a dopaminergic (DA) neuron. (b) The afterhyperpolarization (AHP) between spikes. B, (a) Bursting behavior in the presence of 100 nM apamin. (b) The AHP was absent and spike rate increased during each burst. C, (a) An artificial SK current prevented bursting and regular firing was observed. (b) The AHP recovered to the level shown in A. D, When bursting increased, more artificial SK current was needed to restore baseline activity with a faster spiking rate of 3.6 Hz and a deeper AHP.